
アルペール?カモミールを巡る諸問題

呪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルベール？カモミールを巡る諸問題

【Nコード】

N7564U

【作者名】

呪

【あらすじ】

ある日、罪を重ね服役していたカモは脱獄した。

この重大な事実、しかし内容を秘匿され世界には伝わっていない。だからといってそれは脱獄を許容したわけではなく、あくまで秘密裏に動く為だった。

カモの利己的な判断から始まった脱獄は、世界に様々な影響を与える形で伝播していく……

作者も驚くぐらい、最初はネギ及びネギパーティーが出てきません

この物語は原作からゆっくり乖離していき、更に所々独自設定が入ります

1話 出るもの出られるもの

それはイギリスの地にあった。

それは名前を出せば子供は泣き止み、名前を聞けば犯罪者は赤子のように泣き出した。

その名前は悪名という悪名を重ね、悪逆という悪逆を重ね、悪夢という悪夢を重ねた正義の顎門は罪悪を噛み砕く聖域 ニューゲート監獄と呼ばれていた。

時は遠く遡り1188年、時のイングランド王ヘンリー2世の命令により、ここニューゲートの地に建設され、1236年に大きくその規模を拡大される。

そして悪名の1つとも言える出来事が1780年、ゴードン騒乱と呼ばれる騒ぎでは監獄に火が放たれ、300人もの受刑者が脱獄し、それを上回る多くの受刑者が焼死した。警察機関は全力で捜査をし、脱獄者の多くは再び逮捕され、処刑あるいは別の刑務所に収監されることになり、火が放たれたニューゲート監獄は2年後に再建された。

こうして様々な事がありつつも、1812年に監獄を訪れたエリザベス？フライにより、監獄内で賄賂や虐待、更には監獄内部の不衛生さがイギリスの下院議会に証拠付きで提出され、少しずつではあるがニューゲート監獄は改善されていくことになった。

だがそれでも、ゆつくりとニューゲート監獄は役目を終えていき、1902年には監獄を取り壊され、その跡地にオールド？ベイリー裁判所が建設されたのだった。

これが一般的なニューゲート監獄の歴史の推移。

しかし、ニューゲート監獄には一般人に知られていない秘密があった。それは、ニューゲート監獄地下深くに用意され、未だに現役として利用されている特別牢である、ニューゲート魔法監獄の存在である。

魔法は隠されながら、否定されながらも実在している。杖に乗って飛ぶ事もあれば、詠唱ひとつで人間をどうこうするなんて朝飯前だ。

そんな危険な魔法使いを捕らえ、上部組織であるウェールズ魔法協会の命令のもと『おこじょ』に変えて封印し、牢獄で贖罪をさせるのがニューゲート魔法監獄の仕事だった。

しかしながら、残念な事に崇高な思念は長く続かず、ニューゲート監獄と同じ流れを汲むように、地下にあるニューゲート魔法監獄でも賄賂や虐待が横行していた。

悪名は留まることを知らず、数々の罪人が旧世界？魔法世界を問わずここに送られ、誰にも知られる事なく闇に葬られていった。

この物語は、偶々ウェールズ魔法協会の勢力圏内で捕まった為、手近なこの監獄へ放り込まれたおこじょの脱獄がバレる所から始まる。

周囲から饅えた臭いとともに、幾重もの濁った悪意が混ざった怨嗟の声が耳につき、この監獄の所長であるニック？ヴィルヌーヴは鼻を摘まみながらも、聞き慣れたとはいえうるさい事にはかわりのない周囲を黙らせるべく、腰に付けられた警棒を抜いて手近な牢屋サイズ的にはゲージだが を叩き黙らせる。

ニックは正直に言ってしまうと、自分の仕事に何の誇りも持っていなかった。幸か不幸か正義の魔法使いに興味を持たなかったニックは、父の、そのまた父の、更に昔から続く悪習を打破しようとは思わず、むしろ父や祖父の教え通り生粋の拝金主義者だといえた。既に両親も他界し、自らがニューゲート魔法監獄の所長になったからは、止めようと思えば悪事は止められ、悪名を払拭しようと思えば悪名を払拭できる立場にある。

しかしながら、今も続くニューゲート魔法監獄の悪名は、クライアントがここに求める条件の1つなのだ。

悪名が高いからこそここはおこじよになった犯罪者には地獄であり、地獄だからこそ魔法世界で政争に破れ政治犯とされる魔法使いがこの監獄に投獄された結果、この環境に耐えられずクライアント次第で”自殺”したり”病死”してしまうのだ。

そして当然ながら、政争とは無慈悲にもクライアント側の人間すら敗者にし、政財界問わずおこじよとなりここへ送られてくる。不幸にみまわれたそんな人間には、特別房が準備されている。

中が他の囚人には決して見えないよう、廊下を右へ左へ5重にも用意された扉を抜けると、そこにはまず地下でありながら青空が広がっていた。これは囚人の魔力を使ったフェイクでしかないが、高い天井に映された青空は本物と見紛うものである。

広い部屋の地面には草木が生え、あちこちにささやかながらも、造りが豪華な小屋が点在していて中では何人かが生活をしていた。特別房と呼ばれるここに収監されているのは、全て人間である。

そう、おこじよではなく人間の姿で生活をする囚人だった。

彼らは政争に敗れた者や、つまらない賄賂がバレた者達で、このニューゲート魔法監獄に献金をしている者達でもあったのだ。

魔法世界で捕まり実刑を与えられ、民衆の心を抑える為に悪名高いニューゲート魔法監獄へ移送され、そしてほとぼりが冷めるまで旧世界であるここに滞在し、タイミングを見計らって模範囚等といった理由で刑期を短縮して魔法世界に帰る。

これこそが、過去から今へと繋がるニューゲート魔法監獄の、まさに悪習だと言えるだろう。

ニツクにしてみれば、世の中は金で回っている。それをわかりやすくしたのがこのニューゲート魔法監獄であり、この待遇の差だと理解している。

「やれやれ、上客とはいえあまり急な依頼は勘弁願いたいんですが

……」

疲れたように顔を顰めつつ、手にした書類を目的の小屋へと運んでいく。書類の内容は釈放に関する手続きであった。

目的の小屋に入ると、そこはそれなりのブランド物やアンティークによって飾り立てられていて、部屋の中でソファーに座りながらテレビを見ている軽薄そうな青年がいた。

彼の罪状は婦女暴行によるものだが、その罪を重く見た彼の祖父メガロメセンブリアでも財界にパイプを持つ政治家によりここへ献金とともに送られ、まだ刑期が残っていると言っのに孫に会いたいからと刑期短縮するよう追加献金が送られてきたので、こうして彼は晴れて刑期満了となり、こうして釈放となったのだ。

「でよ、こいつにサインするだけでいいのか？」

側仕えの女 女気がない監獄のために用意された魔法人形

からペンを受けとると、スラスラと書類に名前を書き込むと気だるげに足を組む。

相手がどんな態度であれ、本心から贖罪を願い罪を償おうが償うまいが、あいにくニツクとしては積む物さえ積んで貰えれば興味はない。机に置かれた空のシャンパン瓶だって、彼のような囚人をもつ親族や関係者の献金から成り立っているものである。

書類に不備がないかだけ確認しなおし、問題なしの決裁印を捺してから形式的に人間をおこじよ化させる魔法道具を使い、きちんとおこじよにしてからゲージに入れて監獄の外へと運び出す。こうしないと、流石に一般の囚人の前では様にならないのだ。

また5重に用意された扉を抜け、そのまま地上へ出る所定の位置までゲージを運び出すと、出所の最終段階で今一度おこじよ化が解除され、ついに彼は自由の身になれる。

別れ際に滞在に関する礼を言われたので、とりあえず魔法世界に

帰ってもご贔屓にと言ったのだが、彼は苦笑しながら帰ってしまった。まあ、贔屓の監獄と言うのは冗談にもならないだろう。

胸元から取り出した手帳を眺めるが、今日は他に出所の手続きがないようなので仕事は終わりである。

いや、一応だが急遽出所を早めたせいで、書かなければならない書類がまだ残っているのだが、別段急がなければならぬものでもないので後回しにする。

とはいえずぐに帰る訳にもいかず、所長室に寄ってから帰宅になるのだ。こうして所長室に戻り、先程出所した小屋の魔法人形に片付けを命じ、次にいつ誰が入っても最高の持て成しができるよう準備させておく。

「……これで今日は帰れるか」

カバンを持ち上げると、そのままゆっくり所長室から出て少し右に曲がった先にひっそりと用意された扉を開け　ふと、いつもの癖で反射的に手を伸ばしたが、自宅への直通路へ入る扉が開いている事に首を傾げる。

何故この扉が開いているのか？　いや、そもそも今日はここへ来た時に閉めただろうか？

「まあいいか」

少し悩んだ上にニックが出した結論は、開いているからといって何の問題もないというものだった。

この扉が開いているからといって、この監獄になんら不具合や不都合があるわけではなく、特に困る事はないだろうという考えが判断材料である。

通常ならば監獄と外部を繋ぐ道が開いていたとなれば、それはとても重大な問題になるだろう。

しかしながら、魔法使いとはいえおこじよを収監するニューゲート魔法監獄では、それこそ脱獄を狙う凶悪犯は虐待して氣力を奪っている上に、所謂暗殺やテロを政治家に頼まれて収監された者は特別房で優待されているので脱獄はありえない。

今までもそうして脱獄0匹を達成してきていたので、これからもそのスタンスをニツクも他の看守も変える気は無かった。それゆえに、実際に事が起きた時には脆くなる。

「ヴィルヌーヴ所長！ 大変ですヴィルヌーヴ所長！」

これから帰宅だという所で声をかけられ、後ろを振り向けば初老の看守が冷や汗を浮かべ、息を乱しながら立っていた。

「どうした？」

「A-057のゲージに収監していたおこじよが、おこじよ妖精のアルベール？カモミールが消えました！」

「何だと?!」

まさに青天の霹靂、まさに寝耳に水の言葉だった。

最初こそ何を言っているのかわからなかったが、真剣な表情で口にするのを見てやっと現状を理解し、無様に叫ぶことしかできない。

「も、もう一度監獄内を探しだせ！ 逃げ切れず隠れている場合もある！」

「わかりました！」

今までもこれからも脱獄などあるはずがないとたかをくくってい

たため、ここニューゲート魔法監獄には形骸化したマニュアルしか存在せず、マニュアルもまともに読まれたことすら無かった。

そもそも、人間ならばまだしも、おこじよ化された上に魔力を抜き取るゲージに入れている以上は、たかがおこじよ如き畜生に脱け出せる筈がないと考えられていたのだ。

2話 追うもの追われるもの

夜空に煌めく星々の輝きも、優しげな光で静かに大地を見守る月も、そよそよと吹き抜ける柔らかな風も、この部屋を支配する沈鬱な雰囲気吹き飛ばすには至らなかった。

暗い表情を星々や月の光では明るく照らす事ができず、重たい空気の前には柔らかな風では脆弱過ぎるのか、ただただはね除けられるのみである。

「……それで、もう一度確認したんだな」

「一度と言わず二度三度と監獄内を捜しましたが、もぬけの殻です」

事件を知りニューゲート魔法監獄の裏を知る4人は、円卓を睨み付けるように座って会議をしていた。

内容は簡単なもので、脱獄したおこじよをどうするかというものである。

「しかし、犯罪歴を見るに脱獄を試みるような大物じゃないんだが」

「逃げたのは下着泥棒の常習犯で、典型的なクズですな」

「脱獄の経路は監獄から私の家まで繋ぐ経路か…… 抜かったな」

脱獄ルートの特定も既に済んでおり、正面のゲートを使われた様子もなく、そして監獄に新たに外へと掘られた穴もない以上は、どうやっても脱獄ルートはここであるニツクの邸宅へ続く地下経路だった。

だが、たかだか脱獄如きで彼等がここまで沈鬱な雰囲気を撒き散

らす筈もなく、一番の懸念は脱獄ルートではなく上とのルートだった。

今まで良い意味でも悪い意味でも、ここは権力者の望んだ答えを出す優秀な監獄だった。小屋の装飾には金も時間もかけ、料理はそこそこながらも高級品を使い、さながら3星ホテルのような持て成しをする事で感心を買ひ、その対価として巨万の富を築いてきた。今までここの監獄のお世話になった者には、当然魔法世界の政財界に蔓延る権力者は元より、この世界でも諸々に携わる人間を時には持て成し、そして時には闇に葬ってきたのだ。

しかしながら、ここでもしこのニューゲート魔法監獄が脱獄を許すような”無能”になつたらどうなるだろうか？

魔法世界の酸いも甘いも闇の闇まで見てきた我々から、もしも”優秀”の2文字が失われたらどうなるだろうか？

彼等はそんな時に、脱獄を許すような”無能”な我々を助けるべく動くだろうか？

ニューゲート魔法監獄に収監されたVIPたちは、ここでの情報はまさに政治生命を奪われる傷になるそれを、ただの”無能”が持っていることを許すだろうか？

そう……ここニューゲート魔法監獄の真実を知っている人間は、”優秀”でなくなった瞬間に自分達がしてきたように消される可能性が高い。

あくまで可能性でしかないが、それでもそんな可能性がありながらホイホイと上に脱獄の情報をあげ、連携して脱獄したおこじよを捕まえようと考える剛毅な者はここに居なかった。

「……この件については、握り潰し上への報告は取り止める。しかし、我々だけで脱獄犯を捕らえるぞ」

ニックの言葉に全員が頷き、ゆっくりとしかし確実に逃げ出したアルベール？カモミールを追うべく、ニューゲート魔法監獄の裏を

知る者達が動き出した。

遅々としてこそはいるが、情報はニューゲート魔法監獄へ集まって来ていた。

実家に帰った痕跡はない。そして、正規の手続きで国外に出た記録がない為に、まだイギリス本土に居る可能性があるという事だ。だがしかし、得てして不幸に寄ってくるのは不幸ばかりなのである。

「ヴィルヌーヴ所長、嫌な情報が見つかりましたよ」

所長室へとそんな不幸を運んで来たのは、4人の中で20代と最年少であり勝手ながら期待のホープとして見ているアラン？クビサだった。

彼はニツクに言われて情報屋を漁っていたところ、その驚くべき情報を手に入れたのだ。

本来ならば、情報屋に聞くということはそれを搜しているという情報を売る事に他ならないが、彼等の知っている情報屋は腕がよく自分達を売ることはないとわかっていたので、こうして堂々と情報屋を漁っていたのだ。

何故情報屋が自分達の情報を売らないかというと、情報を漁った情報屋には目に見えない首輪がかけられているのだ。

その理由は簡単で、情報屋たる彼等は腕がよく、もっと大きな情報を手に入れるべく合法非法問わず嗅ぎまわり、中には情報を手に入れる前に消された者や手に入れたが為に消された者もいるなかで、偶々手に入れるまえに捕まり上の『役に立つ』という判断のもとニューゲート魔法監獄で優待された者達だからである。

ニューゲート魔法監獄では、その悪名とかけ離れた優待に目を白黒させ、『役に立たない』と判断された情報屋が殺されるさまも見せつけ、そして釈放する前に上が用意した魔法道具を体内に埋め込み、これで従順な意にそう情報を流して世界を操作する情報屋の出来上がりである。

そんな情報屋の大半は魔法世界へ帰って行つたが、当然ここに残る者も居るのでそれらはニューゲート魔法監獄にとって安全な情報屋だった。

「この写真を見て下さい」

渡された写真を見れば、在り来たりな風景にも見えたが、アランの指差す先を見つめてニツクは息を飲んだ。そこには画面半分で見切れているが、後頭部をこちらに向ける少女と銀の髪飾りに少々隠れてはいるものの、まさに捜しているアルベール？カモミールがそこに居たのだ。

「どこだここは！」

「以前収監したおこじょ協会の幹部だったおこじょ妖精に探らせたんですが、どうにも日本らしいですね。しかも、脱獄して隠れるならまだしも、あの野郎はそこで仮契約までさせてるようです」

憎々しいとばかりにアランはおこじょ\$の振込先とされる、日本の地名が書かれた領収書をニツクに差し出す。それを受け取り振込先を見てみれば、歯が砕けんばかりに食い縛ってから力が抜けたように背もたれに倒れ込み、上の空でため息を吐いた。

そこには埼玉県麻帆良市と書かれており、少し自信がないながらもニツクの記憶が正しければ、その地は関東魔法協会の管轄地だったはずである。

そうならば、本来の流れは簡単だ。　まずはウェールズ魔法協会へ脱獄の事実と脱獄囚の足取りを報告し、ウェールズ魔法協会から関東魔法協会へと脱獄囚の引き渡しを要請すればいいだけなのだが、ことはそう単純でない。

3話 知るもの知られるもの

関東魔法協会のお膝元である麻帆良へ向かうべく、あれからアランは日本へ渡るべく準備に追われていた。

入念な準備には時間がかかる。これが、もし日本への観光旅行が何かであれば、それほど入念な準備は必要ないだろう。

だが、これはそこまで難易度が高くなかろうと、隠密性まで要求される任務なのである。そう考えるとこちらの侵入がバレた場合に備え、本名であるアラン？クビサで日本へ渡る訳にもいかず、その道の専門家から偽名のパスポート等を用意させるのに時間が必要だった。

他にもどれだけ滞在するかわからないので、それなりの荷物を準備する必要もあったし、所長からセーフハウス用に結界を張る魔法道具や転移道具を受け取り、未だに関東魔法協会から脱獄囚に関する音沙汰が無い事を確認してから日本へ向かった。

日本の成田空港に着いてから驚いたのは、今更ながら東洋人が多くて驚いたのだが、これは余談に過ぎない。

とりあえず、麻帆良から遠すぎず、しかし近すぎやしないかと思いつつ、大宮という街にイギリスから予約しておいたホテルがあるので、先にそこへ寄って荷物を置いてから目的地へ向かう。

とはいえ、今日からすぐに麻帆良へ仕掛けるほど大胆でも無謀でもないので、顔を知られていない日本の情報屋をあたることにしている。

残念ながらというべきか、もしくは排除されているのかわからないが、日本には何故か首輪つきの情報屋が居ないので、イギリスの首輪つきから日本の情報屋を紹介してもらっているのである。

今は既に1件目を回り終え、もう1つの情報屋を求めて低層ビルの小さな保険会社に入っていた。ちなみに、残念ながら1件目は最近廃業したのかさせられたのか、そこに居なかったので情報は得

られていない。

「いらっしやい」

店に入るとカウンター越しに、客商売というには愛想の無さすぎる男から声をかけられた。

店内には他に誰も居ないとはいえ、事務机に向かって座った冴えない男は無精髭を生やした顎を撫でつつ、開かれた新聞を片手に足を組ながら、特にこちらを見るわけでもなく「いらっしやい」と言っただ。

これが通常の会社だったならば、もうこの時点で客は店から立ち去るだろう。日本では違うのかもしれないが、イギリスの保険会社とは信用商売であり、それを損なうということは商売ができないと言っても過言ではない。

と、ここまで色々と言っておきながら、そもそも自分が保険云々で来たわけではないと思ひ出し、カウンターから紹介状代わりに渡されていた割り符を見せれば、男は得心がいったとばかりに立ち上がり個室へと案内した。

「どうも、私はここで情報屋をやってる鈴木です」

「この写真について幾つか聞きたい」

ソファアに座って出された紅茶には手をつけず、真っ直ぐに「失礼」と言って写真を受け取る鈴木顔を見る。

先程は冴えないと評した目鼻は鋭く、写真を睨む彼は先程の彼とはまさしく別人ではないかと、わかっていながらもその落差に驚いてしまった。

「これは…… 街並みと遠巻きに見ても判別できる巨大な樹は、十

中十九で麻帆良の市街地ではないかと」

こちらを見ながら、懇切丁寧に写真の部分部分を指差し説明する鈴木だが、この時アランは不幸にもその写真を見た鈴木が眉を軽く顰めたのに気付かなかった。

だからこうして試したわけではないが、わかっている事を聞いて求めていた答えが得られたとばかりに、本来の目的である次の議題へと移ってしまったのだ。

「麻帆良だというのは、こちらでも把握している。問題はこの少女だ、この少女についてこれで得られるだけ教えて欲しい」

カバンから厚さにして1cmの束を取り出し、黙ってそれを机に置いた。

事務的な手続きなんだろうが、それを受け取った鈴木は相談室に備え付けの機械に放り込むと、束にされていた1万円札の枚数と真贋をあらためだし、部屋を機械の音が短時間だが支配した。

「全部本物で100万円ですが、この少女にそんな価値が？」

今度はわかりやすく鈴木が怪訝な表情をしたため、表情を読み取れたアランは在り来たりに「詮索はするな」と口にすると、それも商売だとばかりに鈴木は疑問を取り下げてソファアに戻った。

「仕事は引き受けますが、この情報は急ぎで？」

「払った報酬に価格が上乘せされない程度には急ぎで頼む」

金には煩いアランとしては、100万も払ったのに急かしたせいで特別料金が発生し、払った報酬の何割かをその料金が差っ引いた

せいで情報精度が下がるのは嫌だった。

だからといって、時間的猶予があるわけでもないので、急げる分は急いで欲しいのである。

「それでしたら、4日後…… いや、3日後の昼にでも来て下さい」

「わかった。期待している」

これで日本ですべき任務の第1段階が終了したと、内心胸を撫で下ろしながらアランは立ち上がり、そのまま今日は1度休もうとホテルへ向かって行った。

そんなアランを内心複雑そうな目で鈴木は見送りつつ、写真の少女を探すべく麻帆良の親元である関東魔法協会から公開可能な内容として開示されている資料を読む。

今でこそこんな立場に甘んじているが、昔の鈴木は日本でも名づけての情報屋だった。

いや、名づてという部分に関しては今もだが、情報屋として情報収集に全力をかけていた結果として関東魔法協会に首輪を付けられ、今となつては麻帆良について聞かれたら関東魔法協会が安全だとする情報を流さないとならない。

例えば警備体制のような根幹は、日々あちらから曖昧なものや本物どころかガセまで送られて来て、それを客に流す事になっている。人物に関してもそうで、魔法先生や魔法生徒の情報も入ってくるが、どこまでが本当でどこからが嘘だかわかったもんじゃない。

「だいたい”関西”から来た『近衛』が魔法生徒でないならば、いったい誰が魔法や気を使うと言うのだ。」

忌々しい事に、自分が飼われてるのも鈴木には理解できた。情報屋としての鈴木を信頼する客を裏切っているのも、腸が煮えくり返る思いでわかったいた。そして、逃げたら消される事を誰より鈴木自身が理解していた。

「ちつ。それにしても、この少女は……」

確か近衛と同室に住み、一般人のリストに入っていた少女の筈だが。手を出す価値があるか無いかで言えば、後見人が近衛近右衛門なので要求や交渉の材料にはなるだろうが、逆に言えばそれは近衛近右衛門を。ひいては関東魔法協会を感情面からも敵に回すということになる。

リスクとリターンが割りに合わないと思うが、彼には何かしらの勝算があるのだろう。狭い範囲でしかできないが、そんな彼のサポートを出来るのは自分だけしかない。

とはいえ、敵対行為をとれば消されかねない現状としては、両親が死去している事やバイトをしているという薄い情報だけでは足りないで、久しぶりだが能動的に動いてみよう。と鈴木は考えていた。

例の保険会社の相談室で、1枚の紙切れを挟んでソファに座る2人の男は唸っていた。

1人はこの部屋の主にして、この数日で髭も伸び目の下に隈まで拵えて益々客商売に向かない鈴木である。

あれから知り合いの情報屋に鈴木自身当たってみたが、まるで検討違いだと言わんばかりに『神楽坂明日菜』の情報に変化がなく、もしかすると自分はバカだったんじゃないかと唸っていた。

もう1人は鈴木とは対照的に、目鼻立ちがそれなりにいいアランだった。

あれからアランは別名義で違うホテルにダミーの部屋を2つ借り、群馬の山中にセーフハウスにはもってこいの小屋を見付けたので結界の設置を済ませていたのだが、後見人以外はあまりにも普通でし

かない『神楽坂明日菜』という少女に嘆息し、肩のおこじよは「最近出たらしいがペットか何かじゃないか」という言葉に納得し、同室と書かれた『ネギ？スプリングフィールド』の文字に唸っていた。

「悪いが情報はこれだけだ」

「普通の少女だな」

結局あれだけ努力して探して、これだけの情報となると99%は普通の少女である。残りの1%はまず無いだろうが、途方もない情報統制がかけられている場合だ。

大外れを食らった鈴木からしてみれば、今回の依頼は努力が無駄になって迷惑もいところだが、逆にアランからしてみればネギ？スプリングフィールドにだけ注意すれば問題がないとわかって安心していた。

とはいえ、今は人畜無害なペットでしかないが、そのペットが脱獄囚だとバレル前に捕縛しなければならぬ。

「ありがとう。私はこれから報告があるから、行かせてもらうよ。次も何かあつたらよろしく頼む」

「努力も無駄になったとなれば、あんたは次から特別料金だ畜生」

後ろからグググチと何かが聞こえてくるのを流しつつ、ホテルで所長になんと説明しようかアランは考えながら、イギリス料理の万倍は美味しい飯を求めて去って行ったのだった。

その頃、関東魔法協会のお膝元である麻帆良学園は、日々に例を

みないほど不穏な空気に包まれていた。

正義に燃える魔法先生も魔法生徒も、その伝説に怯える魔法先生も魔法生徒も、英雄候補を抱える故に過保護になる魔法生徒も、桜通りで起きた事件への対処についてぶつかり合い、事件現場よりも空気が軋んでいる。

犯人がわかつているというのに、誰にも手が出せない。その事はとてももどかしく、とても苛立つてくる。

だが、そんな事は彼等には関係なかった。伝説を知り化物を知り、なおかつ実力も知った上で彼女の本質だけを見る者達は、悪を語る彼女が女子供を殺さないと知っていた。

だからこそ、彼等にとってエヴァンジェリンの事は些末な問題であり、むしろコレの方が問題だった。

関東魔法協会には数々の飼い犬があり、その内の1匹が噛みついたのだ。いや、甘噛みにも満たなかったようだが、『ネギ？スプリングフィールド』ではなく、しかも『近衛木乃香』でもなく、未だまったくの一般人で通している『神楽坂明日菜』について嗅ぎわかったのだ。

影すら踏めなかったようだが、目的も理由もわからないが『神楽坂明日菜』について嗅ぎわまる人物が居るというほうが、近衛近右衛門や高畑にとって問題だった。

4話 行くもの行かせるもの

荒い息を抑え、ニツクは突つ伏すように所長室に拵えられた机に倒れ込んでいた。

既に机の上に置かれた物は何もなく、紙は四方にばらまかれ電話は壁に投げつけてある。こんな事が根本的な解決にならないとはわかつているが、それでも物に当たり散らしたくなる時もある。

報告として話を聞くかぎり、よりにもよってあのおこじよ妖精は、あの脱獄囚は、あのクズは一般人をたぶらかし、極東の火種である『近衛木乃香』と、ウェールズ魔法協会と関東魔法協会の確執である『ネギ？スプリングフィールド』にわたりをつけてしまった可能性があるので。

それは不味い、それは駄目だ、それは許される事ではない。言ってしまうと、一般人が脱獄囚という我々を殺しきれる爆弾を片手に、世界でも上から数えた方が早い火薬庫でランデブーをすれば、見つかると同時にこちらを巻き込んでドカンと爆発し、更には火薬に引火して大惨事を引き起こすだろう。

むろん、場合によっては大惨事の全容があきらかになるまで生きていけない可能性もあるが、せめて自分くらいは生きていけると信じていたニツクであった。

現実逃避はさておき、今は関東魔法協会が何を考えているのか読み取るべく、全力を尽くすべきだろう。問題なのは脱獄囚の侵入を理解しているか否かであり、侵入を理解している場合は何故こちらに掛け合っていないか、また知らない可能性は本当にないかを考える。

もしも脱獄囚の侵入を理解していたとして、それを外に漏らさないメリットとは何だろうか？ 一番可能性が高いのは、『ネギ？スプリングフィールド』の存在によるウェールズ魔法協会との確執に、こちらの失態を手札として隠す場合だ。

つい最近やつと聞かされた愚痴を思い出したのだが、本来ならば英雄候補である『ネギ？スプリングフィールド』はウェールズ魔法協会圈内か、そのまますぐにでも魔法世界に連れて行くのかで議論が別れていたのだが、メルディアナの学園長が長年の友誼がある関東魔法協会の長である近衛近右衛門と独自に繋がり、独断で英雄候補を譲り渡した事は、未だにウェールズ魔法協会でも魔法世界でもしこりとして残っている。

そんな友好的とはいえない難い相手の失態を知ったとなれば、最も高く使える時がくるまで脱獄囚の存在は切らないだろう。だから、関東魔法協会が何も言ってこないのかもしれない。

だとすれば最悪の事態を即座には免れられるが、こちらとしては最後に残った首の皮すら関東魔法協会に掴まれていることになり、今日からまたいつ首を斬られるかびくびくして過ごさないとならない。

「だが、本当に知っているのか？」

愚痴にあつた関東魔法協会を要約するに、奴等は『ネギ？スプリングフィールド』を金の卵を産む鶏として飼っているわけでもなく、今後の成長に絡んで地位向上や権益拡大の駒として見ているわけでもなく、なんとも馬鹿正直というか字面通り英雄候補として迎え入れているらしかった。

正義の魔法使いを目指す者が多く、更には自分が正義だと思っている輩が、そんな英雄候補に悪い虫どころか脱獄囚が近づいていると知って、黙っていられるだろうか？

上の引き締めがどの程度かわからないが、末端まで脱獄囚を黙る事はできないだろうし、できないならば情報が漏れている事を鑑みれば、これはもしかすると都合のいいことにまだバレていない可能性がある。

いくら脱獄囚が大胆不敵によその魔法協会へ逃げる胆力があると

はいえ、馬鹿じゃなければ周囲に魔法使いが居ようと黙ってペットに成りきり、その場で雌伏を続けるだろう。それこそ、多少なりとも賢しければバレたら最後、こちらへ引き渡される事はわかるだろうから。

「……電話は買いなおしだな」

あまりにも短絡的な自分の行動に自嘲しつつ、大きく溜め息を吐きながら机の周囲に散らばった資料を集め、今一度ゆっくりと読み返す。

この資料は面倒を承知で、事情を隠しつつあちこちから静かにゆつくりと集めたもので、おかげさまでいっこうに情報は増えないのだが、こちらが関東魔法協会の情報を欲していることもバレていないはずである。

それはさておき、資料によれば麻帆良には巨大で嚴重な結界が敷かれ、結界を軸にした防衛体制が配置されているらしかった。

結界の機能には大都市のど真ん中に魔法使いを住ます為か、かなり強力な認識阻害が込められているようで、そこであるほど一般人の少女に脱獄囚が近づいても、少女が驚かないのも頷ける。

さらには当然ながら、侵入者の感知することも可能のようだが、やはり防衛の根幹に関わるこのあたりの事情は機密にあたるので、『悪意あるものの感知』と『正規ルート以外からの侵入』ぐらいしか情報が得られなかった。

こちらにも侵入を考えている以上は、できれば感知できる悪意の定義を知りたかったし、悪意を持って正規ルートで入るといった抜け道があるのかが重要だったのだが、そこは諦めるしかないだろう。

この情報としては抜け道も重要だが、何よりも特に悪意の定義が重要だった。感知するのは人に対する悪意なのか、物に対してなのかそれとも組織に対しての悪意なのか……例えば何かを追っていたら追跡対象が入ってしまい、それに追走して入ったら組織外の

者であれ悪意を感知してしまうのか。

我々としては関東魔法協会に対して、侵入せざるを得ないという負い目こそあるものの、特別悪意を抱いているわけではない。となれば、それはよそ者同士の小競り合いでしかない。

あくまで感知する悪意の定義がわからない為に確信は禁物だが、目こぼしされる可能性だつてなきにしもあらずだ。いや、むしろ全てを感知しているならば、内部で問題を起こすとはいえ内部に問題を起こすわけじゃないから無視されるだろうし、逆に感知基準が定められているならば、感知され難いだろう。

「だとすれば…… 正面からが一番か」

取り出した麻帆良学園の見取図にある、大きな橋を指差しそつと顎に手を触れる。正面から堂々と、胸を張って肩を威張らせ風をきり、麻帆良の使い手が正義の美酒に泥酔しているところを、素知らぬ顔で我が物顔で脱獄囚を捕縛する。

気付いた頃には後の祭り、何が無いかわからない。居ないものはあっても無くてもわからない。

少しばかり問題があるとすれば、脱獄囚を知らず匿った少女の居場所がわからず、正面から入って捜している内にこちらの尻尾が掴まれかねないということ。

必ずそこに居て、必ずそこを目指せば出会える地点が欲しい。報告としてアランから送られてきた資料を見ても、この神楽坂という少女の行動に癖がない。

どうせならば、毎週何曜日は へ必ず寄るといった癖があれば、追跡も待ち伏せも監視も楽だというのに、少女にはそれが無い。

だとすれば、確実に居る場所は寮か通学路、もしくは学校の3ヶ所では必ず捕捉できるだろう。

とはいえ、庭に入るだけでも好ましくないというのに、要塞と言つて過言ではない学校内部に入るわけにはいかない。

しかし、かといって一発勝負である以上は、どのタイミングで登校するのかわからない少女を待ち伏せするには難しく、周囲の目も邪魔になる。

当然最後の地点である寮も、それこそ監視の目が張り巡らされている筈だ。

「どれもこれも虎口か」

相手が虎よりも狡猾で獰猛な魔法使いであり、まさに必殺空間と言つべき配置をとっているであろう事を考えると、虎口より竜口の方が脅威度的には近い。

如何にその脅威度を抑制し、安全にことをなすかが問題であるのだが…… これを利用するか。

資料に書かれた『全体停電』の文字を見て、眉間に皺が寄つてくるのがわかる。日付は残り1週間もない4月22日で、時間については夜間と書かれているのだが、詳細には書かれていない。

電子的な警備体制が沈黙し、警戒度が上がつていようとよそ者同士の小競り合いとなれば、当然ながら優先順位は低い。ここで出し抜ければ、問題なく脱獄囚の捕縛と脱出は可能だろう。

となると、停電してから即座に侵入するとなれば、相手から無用の警戒を買つだろつから、少しばかり時間をみてから侵入すべきだ。あとは、少女の記憶に関してだが、まあ認識阻害によつてどうにでもなるだろつから、顔を見られた場合を除いて手をつける必要はない。むしろ、手をつけたせいで捜査に本腰を入れられても困る。侵入に関する指示で必要なのはこれくらいだろうか？ 指示には執拗に『穏便に動け』と書いたし、『交戦は断固回避せよ』とも書いてある。

これくらいだろつと軽く頷き、ニツクは静かにそれをわかりやすく紙に書き記していく。指示は最後の引金だ…… 絶対に失敗は許されないだろう。

車のハンドルを小突きながら、心を苛む緊張を打ち消すようにアランは大きく深呼吸した。

何度となくウェールズから届いた紙切れを読み返し、所長の意図を可能な限り読み取り、何度も何度も脳内でシミュレートを行なってきた。

情報を得る努力だつて怠らず、麻帆良の詳細地図をかき集め、停電時間の詳細についてだつて嗅ぎ回った。

地図は麻帆良の学校紹介パンフレットや、手に入った幾つかの写真から中を想像するしかない。これは、侵入者の魔力波長等が記録されていた場合、2度目3度目となれば脅威度が高いと考えられるのを防ぐ為である。

停電の時間に関しても、残念ながら詳細を得るには至らなかった。対外的な停電のアナウンスは日付だけであり、時間は秘匿され例年では朝か夕方か夜におこなわれ、朝の通学時間や昼から夕方にかけての学校が開いている時間は回避されてきたらしい。

それについての情報は少ない。むしろ、ほぼ無いと言って等しいだろう。

この国における情報源として、保険屋に扮する鈴木という男をアランは頼っていたのだが、ある日突然前触れさえずなく鈴木は蒸発していた。

そのせいで情報は極端に薄くなり、だからと言って新たな情報屋と信頼関係を結ぶような時間もなく、更には生来の拝金主義もあって財布が硬くなった結果として、核心に近い情報はあれから得られなかったのだった。

5話 入るもの入られるもの

小さな一室に、大げさなまでにつんざくアラームが鳴り響く。

あまりの音にアランは顔を顰めつつ、鳴り響くアラームを止めてから呼吸を整え、ハンドルを握りなおしてからゆっくりとアクセルを踏んでいく。

このまま行けば、当初の予定通りの時間に到着するだろう。到着予定時刻は23時30分、得られた情報から推察すると まだ停電開始の情報が流れてないからだが 夜に行われることは確定で、時間も21時から25時の4時間だと考えられる。

故に侵入の決行は急ぎすぎず、されど事がなせないほど遅すぎない時間を選び、停電終了の1時間30分前である23時30分と決めていた。

突入に際して気にすべき事は少なく、内側からの侵入や脱出に関する手引きはない。 武器と呼べるような物は緊急時の杖代わりに魔法発動体の指輪をつけているだけで、銃火器はおろか刃物すら持っていない。

これは、まかり間違ってアランが拿捕された場合を考え、ニックが書面でアランに指示したものである。 もしも拿捕された際に、アランが重装備だった場合はどうやっても角がたち、最悪ウェールズ魔法協会と関東魔法協会の外交問題になる。

外交問題にまで発展する頃にはニック自身は殺されているだろうと思っているが、助かる可能性が1%でもあるものを絶やす気はない。

「次を左か」

カーナビを何度も確認し、『麻帆良』と書かれた道路標識をまがれば、ここからも見えるがあとは橋まで一直線である。

じつとりとハンドルを握る手をベタつく汗が覆い、適度とはかけ離れた緊張感に口内から唾がなくなっていく。

敵地が……　そう、敵地が目前なのだ。　より正確に言えば日本という国そのものが敵地であり、麻帆良はその本丸に当たる場所である。

失敗は許されない。　見付かるだけならばまだしも、捕まる事だけは絶対に許されない。

情報源を失ってから精力的に調べてきた結果、関東魔法協会は今までの楽観視を少し改める程度には厳しい組織らしい。

幸か不幸か　いや不幸だろうな　関東魔法協会に侵入して捕まった事例は多いようで、数多の事例を紐解けば、捕まった大半は頭ないし体を弄られて魔法使いや裏の世界から完全に絶たれるか、悪い場合では行方不明も起きているらしい。

本当に無いのか隠したか揉み消したかわからないが、調べた限りではよその魔法協会やらそれに類する組織からの侵入し、そこで捕まりどうなるのかという事例が無かった事が不安と言えば不安である。橋の手前にあるコンビ二前に車を止め、ここからは徒歩で川を渡り麻帆良の地へ入る事になる。

これは停電した麻帆良へ車で入り、ヘッドライトにより位置を関東魔法協会に伝えないためである。　ライトを消す事も考えはしたが、正直に言って停電中の街を無灯火で走る車は不審車でしかないのだ。

部外者が停電中に単独で関東魔法協会のお膝元である麻帆良を歩くのも十分に不審だが、まあそれはこちらを感知できればの話ではあるが。　結界によって感知さえされなければ、いくら優秀だろうと一般人の顔を全て知っているわけでもないだろうから、不審とはいえ警戒はされまい。

橋を渡る足に力が入る。　既に橋の1/4を渡りきり、あと数歩で麻帆良を覆う結界に入る所まで来ている。

目の前に見える暗い静かな都市は、夜の喧騒とは程遠く無音の世

界である。

「行く、か」

最後に自分を鼓舞するように言葉を漏らし、その1歩を踏み出し
絶句した。

肌を焼き焦がすような魔力の波…… それだけで簡単に換算して
も、既に自分数人分にも及ぶだろう。

空を貫き地を穿つ魔法など、才が豊かでない自分では逆立ちしよう
と撃てはしない。 それだけの魔力の奔流 いや濁流とでも言
うべき魔力は、しかしその総量に圧倒されがちだが一切乱れる事な
く、正しくその目的の為に制御され尽くされている。

悪夢だ…… 神か悪魔か誰の悪意かまでは理解したくもないが、
入ってすぐに会ったこれは不味いにも程がある。

戦いの推移はわからないが、この場で戦っているとなればどちら
かは確実に関東魔法協会の人間であり、ここまで派手に戦っていれ
ば 隠れて戦っていても来るだろうが 必ず増援がくるだろう。

不味い不味い不味い、結界の強度も結界内とはいえ外縁ギリギリ
で行われているこれだけの戦いが、外からはその魔力どころか残痕
すら感じ取れないとなると、それ以外の分野も想定より数倍だと考
えた方がいい。

どうする？ 進むか逃げるか…… どちらか見極めて侵入者の援
護をして撃退する事も考えられるが、自分とは桁が3つ4つ違う実
力者を援護する技術などあるはずがなく、まかり間違って援護でき
たとしてもこの戦力差じゃ対等には程遠く、主導権を握られ囷とし
て捨てられるのが関の山だろう。

そこでふと、頭の中の知識に引っかかるものがあつた。

「ネギ…… スプリング、フィールド！」

空を飛ぶ金髪の方はわからないが、たしかにあの圧されてる少年はこの関東魔法協会以最も近づくべきではない少年、まさしく弱点にして地雷であるネギ？スプリングフィールドである。

接近すら控えているものを、接触なんてした日には話しにもならない。アランは作戦を撤退に切り換え、まだ1歩しか侵入していない麻帆良から尻尾を巻いて逃げ出した。

本人はそれが有り得ないと知らないのでしょうか、最終的に撤退を決意したのはネギと戦うエヴァンジェリンと視線があったことで、弾除けの囷にされると考えたからである。

当然ながらエヴァンジェリンにそんなつまらない考えはなく、もう一步でも一瞬でもアランが進むか残るかすれば、ネギと戦う片手間に処分するつもりであったのだが、運よくアランの撤退の判断はエヴァンジェリンの機先を制する形になったのだ。

麻帆良から出られないエヴァンジェリンからしてみれば、実力者でもないアランなど無害でしかない。逃げようが逃げまいが気にならない。

もう少し言葉を足すならば、麻帆良から逃げられてしまえばエヴァンジェリンに打つ手はなく、最強の魔法使いだろうと悪の吸血鬼だろうと無害な少女でしかないので、手を出したいような相手でも出せなかった。

だからしょうがないから目をつむろう、手を出さないなら無視しようと言うほど関東魔法協会も優しくはない。

最初こそ正面から入った事と魔力量の低さから、英雄候補のネギと悪の魔法使いであるエヴァンジェリンの戦いを静観していた魔法先生たちは、橋に現れた侵入者のアランを一般人の闖入者だと感じていた。

判断材料は様々だが、まず魔力量が低すぎる事から魔法使いではない、もしくは麻帆良を狙っていないと考えた魔法先生が居た。

そして、何をするでもなく麻帆良の結界に一步踏み込んだだけでネギとエヴァンジェリンの戦いを見て逃げ出したことから、認識阻

害にかかりきる前に魔法を見て逃げ出したと考えた魔法先生も居た。なにより、戦闘の推移を見極めつつではあるが、エヴァンジェリンが勝ちそうになれば予定より早めて24時前にも停電を解除しようとしているのに、まさに街に電灯が点き始める寸前に正面から入る侵入者が居るだろうか？

「学園長」

「……うむ」

しかし、もしもネギかエヴァンジェリンのどちらかに何かあった時の為に橋の上から見ていた高畑は、睨み付けるように逃げ出すアランの背中をみつめていた。

エヴァンジェリンの性格を熟知している高畑だったが、何事にも万が一というものはある。

怪我が極力起こらないように様々なルールや制約で縛った競技でさえ、場合によっては死亡事故にまで至ってしまうのに、殺す予定のない殺し合い　要するに喧嘩で事故が起きてしまったら、行き着く先は怪我で済むかどうか。

本来ならば侵入者を叩く遊撃戦力でなければならぬものを、学園長に頼み込む形で現地に入り偶々アランの顔を見ていた高畑と、遠見でその顔を見ていた近右衛門の頭には、あれ以来2人の中に刻まれたリストの上位に加えられた男の顔が浮かんでくる。

撒き餌であつた鈴木修一郎を呼び出してから捕らえ、既に幾日も経つてはいるが未だにあの男の名前を吐いていない。いや、鈴木は職業柄か気質かわからないが、客の名前を聞くことは稀であり、頭を壊れるまで弄つても吐かない時点で知らないとはわかつていた。他の情報屋にもそれとなく当たってみたが、彼は会う情報屋によつて名前を使い分けているようで、ドイツ人のグイード？ジークフリート？ホイス、イギリス人のサディアス？エルバート？デューイ、

スペイン人のエメリコ？ソラ？テレビニヨ、そしてロシア人のシードル？ヤロスラヴォヴィチ？ブトケエフ。

恐らくはどれも偽名だろう。既に入国者リストをひっくり返してみたが、リストにそんな名前は存在しなかった。

つまらない手だが、日本人は外人を見て欧州系かアジア系かといった区別はできるが、欧州のどこの国か識別するのが得意とは言えない。そんなところを突く狡猾さもある。

声も翻訳魔法を介しての声で言語はわからず、こちらから手を出さか迷っていたのだが、停電について積極的に嗅ぎ回っていたので放置しておいたというのに、何故この神楽坂明日菜が橋に居るタイミングを読めたのか、そして何故手ぶらで逃げ出したのか。

「高畑君、罅まで追ってもらえるかのう」

「言われなければ独断でも行きますよ」

静かに消える高畑を見て、近右衛門は既に明るくなった学園長室で椅子に寄りかかり、暖かい眼差しでネギに助けられたエヴァンジェリンを見てから、隣の神楽坂に視線を向けてから溜め息を吐いた。神楽坂の情報が関東魔法協会のどこから漏れたのか、それとも相手に読まれた結果なのか……組織のトップとは面倒な舵取りもあって気苦労が絶えないが、情報の漏洩源がここなのか精査する間は根本的に仲間を信用さえ出来ない。

辛いと言うよりは疲れると定められた未来に顔を顰め、できる事なら彼の罅から高畑が全てを引き出して来てくれると信じ、これから魔法先生によって行われるだろうエヴァンジェリンへの糾弾と、それを上手く纏める言葉を考えながらも近右衛門は高畑からの朗報を願って止まなかった。

6話 詰むもの詰まれるもの

右へ大回りし左へ遠回りし、できるだけ目的地を知られないように、できるだけ居たらだが追跡者を撒くよう縦横無尽に車を転がし、ただただアランは全力をもってセーフハウスへ逃げていた。

「くそつたれ！ くそつたれえ！」

逃走車となった車の中は、感受性の高い人間が居たら気分が悪くなるほどの悪意に染まり、一般教養のある人間が乗れば顔を顰めるほどの罵詈雑言で溢れかえっている。

これが逃走車でなく、しかも人目が無ければ今すぐにでも車を降り、怒りの向くままに車を魔法で破壊したいぐらいだった。

怒り心頭といった面持ちのアランだが、彼の感情を正確に表すならばそれは怒りではなく、色々とごちゃ混ぜにはなっているが恐怖に過ぎない。

敵の本拠地に入るという緊張感があった。 任務に成功し、ウェールズで栄達する未来があった。

そんな潜入任務にしては初々しい感情は、麻帆良の地に一步入っただけで粉碎された。

侵入にあたり、予想だになかった大橋で行われたネギとエヴァンジェリンの戦闘は、少なからずアランの精神に負荷を与えていた。例えばあれが、在り来たりな才能同士の戦いや、せめて戦巧者の戦いであればアランにも理解はできなくとも、自身のうちで噛み砕いて処理する事は可能だった。

しかし、しかしだ。 戦巧者が確認する暇こそなかったとはいえ、あの一瞬に一瞥さえできれば圧倒的なまでの才能だけは見てとれる。脳が理解を拒む程の才能差は、蟻と象を大きく上回り最早怪獣映画の領域にまで差し迫る。

アランとて魔法使いであり、アランとて裏の人間である。だが、文武で言えば文の人間であり、まともに前線に行くどころか戦闘もこなした事がない。

そんなアランの前での戦闘が、よりによって雲間に霞む才能同士の戦いとなれば、生存本能に従って恐怖のあまり逃げるのは当然である。

精神を苛む恐怖に打ち克つ為に、アランの精神が無意識に持ち出したのは怒りの感情だった。恐怖を忘れる程の怒りを必要としたが、それにおあつらえ向きの矛先があつたのだ。

「くそっ！ ふざけた情報を掴ませやがって屑が！」

情報屋と顧客の間に最も必要なもの、それは信頼関係である。

情報屋は顧客の信頼を得る為、顧客の情報を流す事はない。顧客も情報屋の信頼を得る為、情報源について漏らさない。

情報屋は顧客を信頼し、重要な情報を顧客に流していく。顧客は情報屋を信頼し、得た情報によって動いていく。

日本に来て最初に手に入れた情報屋は、あの割り符こそが信頼に足る証となり、悪くとも必ず信用はされる物だった。だからこそ、情報源として利用していたのだが、ヘマをしたのかまではわからないが途中で消されてしまった。

異国の地で情報源を失い、今更他の情報屋を捕まえて信頼を得るのもするのも難しく、後はこちらを隠しつつ情報屋を周り続けるしか手はなかったのだ。

名前を変え攪乱し、翌日のメニューに自分の名前が載っても困らないよう細工した。集めた情報を解析し、停電時間は25時までだろうと当たりをつけた。

そして、突入したらあのざまだ。戦いから背を向けた瞬間に、麻帆良の地に灯りが点いたのを見逃す事などできなかった。故に自分の解析は棚に上げ、ガセを掴まされた屈辱と情報屋に対する怒

りに燃えていた。

「もう一度あそこへ行くなんて冗談じゃないぞ！」

周囲の明かりも少ない群馬山中に來ると、そのまま用意していたセーフハウスである山小屋へ転がるように飛び込んだ。

地を這うようにして山小屋に入ると、出国の際ニック事前に用意されていた魔法道具を起動させ、四方の壁を要塞の如く堅牢さを持たせてから、早く出ると願いつつ電話を手を取った。

『 私だ 』

「ヴィルヌーヴ所長！ この任務は私には…… 私には無理です！」

受話器から聞こえた声にすがり付き、玩具をねだる幼児の如く感情的に声をあげ、とにかく過程や結果を口にせず要求のみを喚き散らす。

アランの中の冷静な部分が、今更ながら偶々麻帆良で見てしまった少年と少女の戦いが、あまりにも異常過ぎたせいから心的外傷にでもなっているのかと自嘲し、たぶん電話口に居るヴィルヌーヴ所長は眉を顰めつつも現状を理解しただろうと予想していた。

冷静な部分が導き出したその見立ては正しく、電話口で急に怒鳴るように喚くアランの声を聞いたニックは眉を顰め、しかし用意した2つの時計のうち日本時間を示す時計を見てから眉間を揉んで黙り込む。

本来の電話による戦果の確認は、これからまだ1時間以上あとの事だった。となると、電話が来て最初にニックが考えたのは、余りにも早すぎたので大成功か大失敗かのどちらかだった。

大成功なら1時間前倒しだろうが、もっと前から電話があっても文句を言うところか感謝の言葉が溢れるだろう。

急いで関東魔法協会への突入をしたのか、それとも侵入する前に捕縛できたからこそ連絡が早かったのか問いただし、侵入という問題すら起こさずに捕縛したのならば、帰国後に珍しく秘蔵の高級ワインを振る舞ってやりたいぐらいだ。

しかし、大失敗ならば話しは別だが、もとよりニツクはこの電話が大失敗を伝えるものである可能性は少ないと考えていた。

あれだけ樂觀的な考えをもつニツクだったが、樂觀的なだけでは今まで生きてこられない。部下の能力を把握しているニツクからしてみれば、あのアランが何らかの大失敗を犯した上で逃げ帰れるとは考えておらず、大失敗はアランからの連絡が無いからこちらに連絡がくるかのどちらかだと考えていたのだった。

だから緊張感少なく電話を受けたニツクは、しかしその予測を裏切る結果に顔を顰めていたのだ。

「麻帆良で何があった？」

『実は
』

切迫したアランの説明を聞く毎に、ニツクの眉間の皺が深く刻まれていく。この時、事態を説明するアランとニツクの間には、決して埋められない溝があった。

それは簡単なもので、実際にそれを見たか見てないかによる認識の違いである。

アランからしてみれば、自身の魔力量など嵐に吞まれる木の葉程度のものではないと否応なしに理解させられ、外見こそ子供同士の戦いでしかなくとも一瞥でもされれば潰されるという威圧感をうけ、その恐怖によって逃げ出したのだ。

だが、その戦いをニツクは見えていない。どうせ麻帆良に入っただけ、中々戦闘を目の当たりにして臆病風に吹かれ、逃げ出した上に面倒なプライドから変なこじつけに走ったのだて考えてしま

った。

もしもだが、あの場に居たのがアランではなくニックだったとしても逃げ出さるうが、物事にもしもはなく、ニックにはアランが失態をおかしたという認識しかなかった。

不幸とは逃げるものを追い続けるもので、ニックが与えた結界を組む魔法道具は、転移用の魔法道具を片手に電話で喚くアランに多大な幸運と小さな不幸を与えた。

そもそも考えて欲しい。金にうるさいニックが、高価で高性能な魔法道具をぽんと渡すだろうか？

転移用の魔法道具は高価な物を渡している。これは、安物で転移が失敗されるのも困るし、逆に転移は出来たが簡単に転移先を探知されるのも困る。これは、後々自分達に返ってくるのだ。

しかしながら、攻められる前提の結界は任務の特性から考えて、絶対に必要になるとは言い切れない。

だからこそ、堅牢でありながらも戦闘者にとっては欠陥品と揶揄される魔法道具を安く買い、それをアランに与える事にした。

高性能だが性能のあまり欠陥品というのが、この結界の難点である。製作者はこれを作るにあたり、堅牢さのみに目を配った。

中の人物の気配を漏らさず、中からの音や魔力を遮断する性能はしかし、逆に外に居る人間の気配や音をも遮断してしまい戦闘者には不評だった。

とはいえ、アランの力量から考えれば、建物の内外を遮断されようがされまいが変化はなく、それより堅牢さの方が重要だとニックは金額と実益から考えていたのだ。

そして、それは正しい。実際にアランは実力が少なく、如何に努力しようと建物の外に誰が居るかわからない。

小さな不幸とはこれであり、外に誰かが居るのがわかるという万に1つ起こらない事象が、この魔法道具によって0になったのが小さな不幸である。

では、多大な幸運とは何か？

『だから、もう無理なんで』

「……アラン？　おい、アランどうした！」

急に電話が不通になった事に驚き、声を張り上げるしか手が無いニツクは何が起きたかわからないが、起きてはならない事が起きたのだけは理解させられた。

電話を掴んでいたアランは、まさか追跡者が居たとは知らなかった。知っていたならニツクにそれを伝えただろうが、知っていたも対処はできなかっただろう。

麻帆良から逃げるアランを追跡していた高畑は、少し時間がかかりながらもこうして山小屋に辿り着き、前でエンジンすら止まっていない車と逃げる車が一致する事を確認した。

山小屋の中に明かりは点いておらず、暗い山小屋には人の気配も風の音すら聞こえてこない。

既に転移した可能性も考えるが、逆に麻帆良から即座に逃げるのならはその時点で転移すればいい話である。とはいえ、脳裏に逃げ出しながら転移する力量がない可能性が過るが、小さな証拠すら逃すものと力を込めて扉に手をかけて　その堅さに驚愕した。魔力は一切感じない普通の扉だったからこそ、普通の錠前程度ならば捻切る気持で力を込めて捻つたのだが、扉は壁と一体化したかのようにびくともしない。

山間の風景にみあった自然な木造の山小屋は、しかし今の感触からすると高畑には巖にすら見える堅牢さがあった。

「それならそれで、やりようはあるさ」

このように堅牢な結界の類いが残されているとなれば、畏でない限り中に誰かが残って居る可能性は高いと高畑は口の端を歪め、自

らが高めた技量を惜しみなく晒すべく、軽い呼吸とともに両の手に魔力と気を集め始めた。

本来であれば反発しあうそれらであるが、高めた技量に絶対の自信を持って両手を合わせ、至高ともいうべき技術である咸卦法を身に纏った。

……アランはまだ、気付いていない。

7話 負うもの負わせるもの

荒れ狂う魔力も昂る気も、それを混ぜて御す高畑の存在も、何もかも知らずにアランは受話器を握りしめていた。

不穏な気配を感じる事はなく、虫の報せも全く感じないアランは、それこそ気付いたら結界ごと山小屋が吹き飛ばされていくのを、何も脳内で処理できず黙って見つめていた。

音にするならば、ゴンというような音だったかもしれないし、もしくはバンという音だったかもしれない。

音を例えるならば、限界までアクセルをベタ踏みした大型トラック同士が正面からぶつかるような音だったかもしれないし、想像もつかない量のダイナマイトにガソリンをぶちまけてから火を放った爆発音のようでもあった。

要するに、だ。アランは最高に混乱していた。

床に尻餅をつきながら、見上げるように啞然としつつ音の鳴らない受話器を耳にあてたまま、呼吸すら止めて静かに発生源へ視線を向ける。

実はこの時、高畑は壁の堅さを過大評価して全力を尽くし、自らの必殺とも言える豪殺居合拳を撃っており、要塞にも似た壁を食い破る豪殺居合拳は壁を破っても力が衰えず、もしあと少しでも結界がもたなかったならば、アランは壁とともに壊れていただろう。

これこそが、アランが与えられた多大な幸運である。生きている事にくらべれば、膝からあらぬ方向に曲がった右足など不幸の内にも入らない。

「あつ、あつああんたは……」

写真で見た事のある眼鏡を掛けた優男は、しかしアランの心臓を握り潰す程の威圧感を放ち、黙って近寄ってくる。

あちこちに壁だった物や家具だった物が散らばる中で、逃げようと立ち上がったアランだったが、最初こそ恐怖のあまり何の痛みもなく立ち上がった。だが、その第一歩を踏みしめる余裕もなく……無様に瓦礫へと倒れ込む。

人間は転ぶ時は、反射的に手のひらを地面に向けて倒れるのだが、恐怖に侵食されるあまりアランは右手に球体状の転移用の魔法道具を握り、左手には諸般の事情により”コードレス”になってしまった受話器を握りしめて、掠れる声にもならぬ声をあげるだけだった。いや、そんな声も一瞬の事だ。瓦礫に足を取られて転んだとばかり思っていたアランが、チラリと足元を見て歪に曲がった膝を確認してしまう。

ものには限度や範囲もあるが、傷等は得てして存在に気付かなければ痛みを感じない事が多い。それは、紙によって指先を切った事に気付いてから痛みだすことしかり、蚊に食われたのに気づいた途端に痒くなることしかりである。

先程も言ったが、当然限度はある。しかしながら、そんな限度は場面毎に、条件毎に大きく増減していく。

この場面で言えば、『初めての実戦』『敵による急襲』『麻帆良での心的外傷』『圧倒的な敵』他にも様々な条件があるが、それを加味した上でも劣悪な条件以外は存在せず、アランの脳も神経も精神も何かしら何まで全て麻痺していた。

そういった事もあり、自分の目で見てアランは初めて骨折　しかも骨が肉を突き破る開放骨折　に気付いたのだった。

「ぐっがああああ……　足が、足があああ！」

痛みに亀裂が入ってしまったえば、後は罅の入ったダムが如く一気に崩壊してしまう。

大きな怪我なく生きてきたアランからすれば、骨折の痛みはまさに地獄の苦しみである。しかも、普段目にする事のない自身の骨

が見えるとなれば、精神的に苛むものは大きくなってくる。

掠れた声から悲鳴にシフトチェンジしたアランは、しかし現状において開放骨折程度は細事でしかないという認識を忘れていた。

「ひぐぎやああ？！」

開放骨折にばかり気を取られていたアランの左足の膝が、本人の目の前でまるで万力で潰したかのように、聞くに耐えない音を響かせて潰れたのだ。

奇襲をしてから数少ない時間が経過しただけだったが、それでも高畑はアランの戦力について正当な評価を与えていた。最初こそ余りの引き際に過大評価をしていたが、奇襲により足を怪我してからの混乱ぶりから怪我に耐性がないと言うこと、そしてここは既に戦場であると言うのに握りしめられた受話器 球状の物は不明だが を見て、圧倒的に戦闘経験が無いと見抜いた。

だから戦闘的な思考を切り上げ、痛みに関わり安全であり絶対的に逃がさぬべく、骨折している足とは反対の足を潰す事にして実行に移した。

結果は上々の様で、濁った悲鳴こそあげはすれど、逃げる素振りには既に残っていないようだった。

「悪いけど、僕と一緒に来てもらっよ…… 君の意志は必要ない」

もう詰んだ。 終りだとはかりに、アランの意識を刈り取るべく居合拳を撃とうとしたところで、急にアランの目に光が灯ると右手を動かした。

それに対して、全く高畑が驚かなかったと言えば嘘になる。 高畑に並ぶとまではいかなくとも、相手が強者であれば一挙一投足を見逃さぬ集中力が必要だが、逆に圧倒的に下に位置する相手には集中力が欠けがちである。

アランは高畑と比べるまでもなく弱者である。そして、先程は事実心が折れてすらいた。

的確にそれを嗅ぎとった高畑は、少なかった警戒心を更に削ぎ落としてしまった。アランはそんな高畑の予想を裏切り、そして自らの心を持ち直したのには理由があった。

恐怖で頭がどうにかなりそうなアランは、偶々であるとはいえ未だに手放さない右手のそれに気付いた。そこで考え付いてしまった…… これを使えばこの状況から脱出できるんじゃないかと。

この状況に絶望していたからこそ、思い立ってからの行動は殊更速かった。この転移用の魔法道具にも大きな長所と短所があったが、今のアランからすれば長所以外は無いに等しい。

この魔法道具の売りは発動速度であり、球体の中には外からは解らないが転移用の魔法と、それをなすだけの魔力が最初から込められている。転移するのに面倒な詠唱がいらないければ、使用者の魔力すら必要としない優れた1品だ。

使い方も看板に偽りなく、行き先を念じて地面に叩きつけるのみで転移魔法が発動する。だが、当然欠点はあるが、あくまで先に全てを準備してある分だけ遊びがなく、使った本人以外は転移させる事ができないが、アランは1人しか居ないうえに高畑を巻き込む事を考えれば今は長所だった。

そんな事は知らなかった高畑は、不運にもアランの右手を叩き潰すべく動いた。

そうだと知っていたアランは、幸運にも高畑の読みを上回る事に成功した。

「がああぐつきぎがあー！」

「なっ!?!」

醜惡な笑み。

言葉にならない声。

回避出来ない一撃。

驚愕の声。

軋む歯。

風の音。

実際に高畑はアランの右手に居合拳を直撃させ、魔法道具を”叩き落とし”た。避ける右手を狙ったが、手には直接当たらないとみて取り落とさせるべく手首を狙いにいったのだ。

地面にそれを叩きつけようとしているアランを助長するように、その一撃は確実に手首を砕いて右手の握力を奪っていた。

ある意味では、まさに大金星とも言うべき勝利だった。並べて比べるのが酷だという戦力差を覆し、アランは逃げ切ったのだ。

とはいえ、代償も大きい。両足は既に歩くどころか立つことさえ難しく、右手はまともに動かない癖に痛みだけは伝えてくる始末だった。

だが、それもウェールズにさえ帰れば、金は掛かるが魔法ですぐに治るものである。

そう、帰れば、だ。

痛みのあまり淀む思考は、もはやまともに転移用の魔法道具を運用する精神力はなく、発動が早い故に正しく使わねばならなかったこれは、残念ながら正常に起動していない。

使い方は先にも書いたが、行き先を強く頭で念じて地面に叩きつけるだけである。だが、痛みに思考が負けたアランの精神は正常とは言い難く、頭のなかには『ウェールズに帰りたい』という強い願いよりも、もっと即物的な願いである『敵地から逃げたい』というものの方が強かった。

そのせいもあり、目的地は転移魔法を使うにあたって最も注意すべき事であった、所謂目的地の曖昧化という愚を犯してしまった。

どれほど素晴らしい転移用の魔法道具を使っても、どれだけ素晴らしい魔力とその制御により転移魔法を詠唱したとしても、目的地

がきちんと定まっていらない転移ほど質の悪いものはない。

しかも、地面に叩きつけるという過程を経たうえで発動するこれは、落とす程度では誤発動しないよう作られていた。それほどの硬さは用意してあったが、不運にも手首に当たった居合拳は地に落ちる前の魔法道具に擦り、小さな傷から精密にそれだけが必要량だとされる魔力を少しだけこぼれさせていた。

精緻を必要とする転移魔法に対して、僅かばかりとはいえ誤差を与えた結果、この2があいあわさって アランは見知らぬ森に飛ばされていた。

「……は？」

この一瞬だけ、アランの精神を蝕む激痛が消え失せ、黙って前後左右を見回した。

見たこともない森に、見たこともない山が周囲にある。空を遮る曇ひとつ存在せず、夜空に浮かぶ金色の月は地表に蠢く有象無象を睥睨する瞳であり、もしくは賢しくも動きまわる人間を嘲笑しつつも観察する為のぽっかりあいた穴だろうか？

地獄の釜に放り込まれ、四肢の内の3本を煮えたぎる熱湯で茹でられる絶望する様を、あの金色は笑いながら見ているのだろう。

今一度周囲に気を配れば、吹き付ける風は余りにも脆弱な自分を嘲笑い、揺らめく木々は全身を震わせて笑っているように見える。

死を具現化したような光のない暗黒で瞬く星からは悪意を感じ、花は毒蛾の如き醜悪さと美しさをない交ぜにした淫猥な香りで悪意を誘い、鳥も獣も蟲もギチギチとガリガリとゴリゴリとおぞましい音楽を奏で悪意をさらけ出す。

「いやだ、もういやだ！」

この時のアランの精神は、下手な心理学者が診なくとも何らかの異常をきたしているのはみてとれた。地面に這いつくばりながらも頭を振り回し、唯一動く左手だけを器用に使い頭皮の損傷などお構い無しに頭を掻きむしる。

痛みから気絶ではなく狂気を選んだ精神だったが、むしろその狂気に引きずられ過ぎた事もあり、遂には意識を手放す選択をした。そんなアランの声を聞いたのか、ゆっくりと歩いてくる音がしていた。

「なんや、どうしたんやこいつ」

アランの怪我を確認した少年は、見つけたものはしょうがないと自分より大きなアランを担ぎ上げ、来た道をゆっくりと戻り始めた。意識もなく担ぎ上げられたアランには知るよしもないが、ここは紀州の山中だった。

8話 聞くもの聞かせるもの

自分に与えられた部屋で、いつものカバンに現地での滞在用の荷物を放り込み、パスポートを確認し飛行機の手ケットは明日渡されるところを考えて、そのままベットに倒れ込む。

その表情には深い悔恨と、隠しきれないほどの自己嫌悪が混ざりあい、逆に無表情になるという化学反応を引き起こしていた。

黙々と荷造りをしていた高畑は、これが終わり次第すぐにでも出張する手筈になっていた。行き先は、そう 北アフリカだった。政情不安から魔法使いが暗躍していると通報があり、関東魔法協会に所属する高畑としてではなく、当然麻帆良の教師としてでもなく、『悠久の風』に所属する高畑へと命令が下って日本を離れる事となった。

これには今から日本を 否、神楽坂明日菜の元を離れなければならないという不本意なものだったが、関東魔法協会の理事としての近衛近右衛門の説得もあり受諾していた。

これには当然ながら、少なくとも思惑がある。

いま麻帆良が、関東魔法協会が、そしてナギ？スプリングフィールドの遺産が直面している問題がある。

一番重要でありながら、一番情報がないのはナギ？スプリングフィールドの遺産である神楽坂明日菜。彼女について知る者は少ない方がよく、相手によっては確実に命に関わるだろう。

もう1つの遺産である真祖の吸血鬼エヴァンジェリンは、直接本人に被害は無いだろうが、むしろ遺産としてではなく存在を起因として麻帆良に問題を起こしている。

つまらない話だが、正義を絶対視する魔法使いにとって吸血鬼は、しかも悪の魔法使いともなれば存在を容認できるものではない。

そんなエヴァンジェリンが、自ら踊ってもネギ？スプリングフィールドにぶつかっただというのを理解できず、実力で排除すべきだ

と囁する者が多く居て、その規模は近右衛門の予想より遙かに大きかった。余りの規模に、追跡している高畑を断られたが呼び戻すべく連絡をした程だ。

間接的な部分になるが、犯人に逃げられた理由として、少なからずこの電話によるロスタイムがあっただろう。

とにかくその場は何かしたが、いつ魔法先生達が暴発してもおかしくない。それは高畑にとってもストレスだろうし、逆に高畑というエヴァンジェリン派の実力者が居る事は彼等のストレスだろう。

多少の暴発ならば、近右衛門でも鎮圧や抑圧が出来るから問題はない。だからこそ、火種にならないように麻帆良から遠いアフリカ大陸へ移動させた。

本人は是が非でも残りたいと言っていたが、逃がした以上はここから求められるのは戦力ではなく、あくまでフィールドワークであつて、犯人が見つかるまで高畑の出番は無いと言い聞かせることで何とか日本から高畑を追い出せた。

これで、関東魔法協会の外敵に高畑が当たらない状況を作り出し、よって山小屋という証拠に人が居ないようにした。ともすればいつ暴発するかわからないエヴァンジェリン討伐を声高に叫ぶ連中の内、最も中心に近い5人の魔法先生を呼び出して、有無も言わずに山小屋での証拠集めへと派遣した。

これで不用意に煽る魔法先生を麻帆良から外し、煽られてその気になった者の飛躍した思想を収束させてしまえば、証拠が集まって戻る頃にはほとぼりも冷めているだろう。

安心とはいえないが、安全ではあるだから。

良い意味でも悪い意味でも、電話を受けていたニツクの動きと決

断は早かった。

良い意味では、そう、あの電話を受けて即座に状況を整理できたこと。整理できた情報を頭で咀嚼し、もう既にのっぴきならない所まで来ていると理解し、対策代わりと言うのも難だが、即座に上へお伺いを立てた事だ。

これは当然早ければ早いほどよく、選択肢が多く与えられ検討も楽になる。

悪い意味では、これが提案があつて上へお伺いを立てるのではなく、あくまで現状打破の手を考える事を放棄した挙句、上に泣きつくだけの行為でしかないという事だった。

突然の連絡でそれを聞かされた上層部 即ちメガロメセンブリア元老院議員とウエルズ魔法協会役員 は、寝耳に水の事態に目を皿にすると、理解が及ぶに連れて怒りの感情が止めどなく溢れてきた。

いきなりそんな連絡を受けたウエルズ魔法協会の役員であるランディ？ロジャーズからしてみれば、何で直ぐに報告ができなかったのかと怒り、今更とはいえ急いで関東魔法協会について調べ始めた。

ランディ経由で連絡を受けたメガロメセンブリア元老院議員のジョゼフ？キングとしても、余りにも急すぎる話しに半ば啞然としつつも隠蔽を試みる浅慮に腹を立てるが、他の誰でもなく連絡が最初に自分宛で届いた幸運を考慮した上で、次のゲート開放に合わせて旧世界へと渡る事にするが、ゲートの都合で少し日程が先に延びてしまった。

この日程によりランディも上を考慮してニツクを勝手に処罰できず、この問題をジョゼフと同じく自分に持ってきた事を幸運に思いつつ、自らの所属する派閥のイニシアチブを握るべく動き出した。

彼等の派閥の目的は、関東魔法協会理事長の強引な手引きと、ウエルズ魔法協会の理事でありながらもメルディアナ魔法学校の校長として勝手に結託し、かの英雄の息子であるネギ？スプリングフ

イールドのウェールズ魔法協会への奪還と、理事の失脚へ動くべく精力的に会合を繰り返す。

当然魔法世界からゲートが繋がらなければ旧世界には来れないとはいえ、ジョゼフも暇をしている訳ではなく彼も精力的に元老院で動き出している。

動き出した内容もランディと似たり寄ったりだったが、単純に比べるならばジョゼフの方が遥かに悪辣だったと言えよう。ジョゼフは自らの立ち位置や権力基盤、現在の様々な情勢を考慮した上で2つの派閥に顔を出したのだ。

その2つとは、ウェールズ魔法協会からネギ？スプリングフィールドを魔法世界で自らの元に置き、関東魔法協会に出し抜かれながらも未だに虎視眈々と権益拡大の道具として英雄候補を狙っている派閥と、ナギ？スプリングフィールドという英雄の負の遺産としてネギ？スプリングフィールドを狙い、殺し損ねながらも未だに引導を渡すべく意気込む強硬派とも言うべき派閥だった。

余りにもあまりな話だが、ジョゼフはこの2つの派閥のイニシアチブを握りつつ、どちらかに情報を制限したり優先したり派閥の動きを流したりして足場を固め、より確実な利益を得るべく動き出したのだ。

この時点でニツクの予想とは少しだけ外れているが、大きな餌の前に誰も特にニツクを消そうとは考えていなかった。ただし、誰の勘定にもニツクの命は入っていなかったが。

携帯電話の日付を見れば、既に日付は変わり現在は4月18日になっているのに諸澤は気付き、相手の時間を計算して携帯電話を弄っていた。

諸澤を含めた5人にとって、ここ数日はまさに怒涛のように過ぎ

去ったと言っている程に内容が濃く、そして濃さに反比例して得るものは少なかった。

彼等は4月15日に学園長の指示に従い、人手不足を理由に麻帆良で散り散りとなって、たった4時間ではあるが休む間もなく侵入者から麻帆良の都市を、学校に通う生徒を、周辺住民も全て命がけで守り通した。正義の名のもとに敵を下し、正義たるべく街を救い、正義たらんとして人々の安寧を守ったのだ。

だからこそ、彼等には同日同時刻に起きていたそれが許せなかった。それとは、正義の集団である魔法使いを貶める罪人、エヴァンジェリン？A？K？マクダウエルによる英雄に成るべき存在であるネギ？スプリングフィールド襲撃。

今まで善意無くとも非協力的であり何かと問題になっていたエヴァンジェリンだったが、それまでは決定的な問題を麻帆良で起こしていなかった為に、諸澤はとにかく排斥だと叫ぶだけのガンドルフイーニといった面々から距離をおき、どちらかと言えば明石のような中道に近い立ち位置を示して来ていた。

しかしながら、いくら実際に被害は無いに等しい結末だったとはいえど、今回の事は比較するまでもなく明らかに”決定的”で、むしろ”致命的”な行動だろう。だから諸澤は立ち上がり、今まで抑えていた分が溢れたのか気付けばエヴァンジェリン排斥の急先鋒になっていた。

それを望むところだと受け止めるだけの気概と、正義を信奉するが故の希望が諸澤に備わっていたのは、いったい誰の不幸だったのだろうか？

元々戦闘だけがメインではないがNGOとして世界を周り、時には高畑と同じ戦場にも居た諸澤は人望も中道派の中にはそれなりにあったため、彼がエヴァンジェリン排斥の急先鋒となったのに引きずられるようにして、それこそ勝手に中道派の切り崩しが行われてしまった。

これに活気付いた強硬派は、嘆願書という形で関東魔法協会に所

属する魔法使いとして署名を集め、理事長である近衛近右衛門に『エヴァンジェリン討伐』を正式に要求するに至っていた。時期の理由としてはネギに敗れた疲労もあり、しかも結界が効いて魔法がまともに使えない事と、戦闘で使った魔力を回復する為にまた生徒が毒牙に掛かるのを防ぐ為である。

予想よりも遥かに大きなうねりを受け、暴発から最悪関東魔法協会として内側から瓦解する危険を感じた近右衛門は、まず渡りに舟だと急いで高畑を『悠久の風』の依頼によりアフリカへ飛ばし、強硬派に蔓延る抑圧感を開放した。

どこからどう見てもエヴァンジェリン派でありながら、そのエヴァンジェリンに勝るとも劣らない実力者である高畑の存在は、巨大な戦力という逼迫感を与えてしまい、そこからくる抑圧は学園内とはいえ一般人のまえて魔法先生が無意識にピリピリしてしまう程だった。

強硬派のガス抜きというよりは、むしろ余裕を持たせる事で暴発を抑えた近右衛門は次の手として、高畑が抜けた穴である証拠の山小屋の調査に諸澤と、彼に近しい4人の魔法先生を4月16日の段階で派遣すると決定した。

優秀な魔法先生として公示された5人は、明らかに意に沿わない自分達を麻帆良から外すのだと理解できたが、そんな個人的な理由の為に麻帆良を狙って逃げ出した相手を見捨てるはずがなく、正義の信念に則って群馬山中の山小屋をまる1日調査していたのだ。

そして、たった1日とはいえそれなりに集まった証拠を片手に、彼等は彼等なりの戦いを始めようとしていたのだった。

9話 追うもの追わせるもの

別段彼等は自分達が擁護されるとは思っていないが、自分達が正しいとは考えて行動していた。

絶対的な正義の中に存在する異分子の排除は、決して間違った主張ではない筈であり、その結果がこうして麻帆良から外されたとなれば、それは当然受け入れざるものでも受け入れた。

他は心底エヴァンジェリンの排斥のみを考えているのかもしれないが、元より中道派だった諸澤からすれば最低限の譲歩として、関東魔法協会によるエヴァンジェリンの魔法薬の管理と、今回の問題を起こした事に関する学園長による叱責と、事件による被害者への本人からの謝罪があれば、本当に最低限ではあるが手打ちが可能だと考えていた。

それは当然オフレコとして学園長にも伝えていたが、返ってきた返答は無言であり、気付けば麻帆良から外される仕打ちである。

わざわざ命令を聞いて群馬山中まで来たのも、あくまで麻帆良を守るという正義の為であって、個人的な事を言うならば納得もしていないし疑念が渦巻いていた。

こんな時に、誰が言ったか思い出せないが　もしかすると自分が言った可能性もある　この中の誰かが、『学園長は我々を信用せず、我々の実力を信頼していないのでは』と吐露してしまった。

その言葉は他のどんな言葉より雄弁で、心にプライドに正義に深々と突き刺さり、5人を落胆させるには十分だった。

だからこそ、ネガティブな空気が蔓延する中でありながら、それを払拭する声が上がったのは必然だったのだろう。

『だったら俺達の実力を見せれば、学園長の力添えが無くとも一人前にこなせると信頼してくれるんじゃないか？』

そこからは、あれよあれよと話が盛り上がって収集がつかなくなり、最終的にはこうして時差も問題無いからと諸澤は意を決して携帯電話に耳を当てていた。

『はい高畑ですが』

「ああ、高畑先生ですか」

そう、電話の相手とは高畑？T？タカミチである。

『どうしたんです諸澤先生？』

「今回の搜索ですが、様々な報告があります」

急な電話に驚く高畑を尻目に、諸澤は今回の搜索で見つかった情報をどんどん高畑に開示していく。

実行犯の名称は不明だが、電話先を辿ると犯人はニューゲート魔法監獄の所長であること、実行犯はアルベール？カモミールというおこじょ妖精を下調べし、神楽坂明日菜についても調べていたことを学園長に報告する前に高畑に伝えた。

これはこの停電の時期は、殆どの場合において海外出張している魔法先生も麻帆良に帰ってきていて、即座にアフリカへ渡った高畑がイギリスに最も近かった為である。

討論にも近い盛り上がりの中では、自分達が行って犯人を捕らえる事こそ結果であり手柄だという話しもあったが、それより必要な人材を合理的に選び派遣した方が結果としては上々だという結論が出たために、白羽の矢が高畑に立ったのだ。

5人にとって幸運だったのは、高畑という人物が『神楽坂明日菜』という一点だけに対して箍が緩く、意図していないとはいえその弱点ともいえるべきそれを突けた事である。

高畑にとって不幸だったのは、実行犯を取り逃がした深い悔恨と、その実行犯を捜す捜索から外され怒りの矛先が無くなっていたところへ、ぽんと犯人が現れたことだった。

そして、全ての者にとって不幸だったのは、5人の独断専行を止められなかった事だろう。

「既に学園長へ報告したところ、一番イギリスに近い高畑先生へ犯人であるニック？ヴィルヌーヴの捕縛の任務を最優先させ、捕縛次第帰国するようにと言付けを受けています」

『……学園長が？』

幸運にもこの時、高畑は頭に『何故学園長は直接僕にそれを伝えないんだ？』という疑問が浮かんだ。きつと、これが最後の分岐点だったんだろう。

そして高畑は、不幸にも疑問を頭から吹き飛ばし、自らの拳を向けるべく連絡の礼をする急いで非正規手段によるイギリス入国を目指して動き出していた。

電話を切って内容を報告すると、5人は肩の荷が降りたように笑みを浮かべた。

犯人を捕まえる事は、誰がどう判断しても正義である。そして、それは必ず行われる事であるならば、事後承諾は確実にとれる保証があるということになる。

諸澤に今後この件について、冷静になってから述懐するチャンスがあるとしたならば、必ず後悔しただろう。

何故ならば、海外出張も多い諸澤は外交というものを多少知っていて、他所の土地の他所の領域の他所の領分を侵すには、それだけの時間と対価が必要だと知っていたからだ。だから、こんな無鉄砲に拙速に動けるものではないと、そう口にしただろう。

高畑も当然その程度は理解しているが、彼は学園長を信頼してい

るからこそ、許可とは学園長がそういつたしがらみの中からもぎ取ってきた結果なのであって、それに報いるのが自分だと割り切っていたのでこの責任からは除外される。

その日の内に動き出し、イギリスまでの密航を準備して19日の深夜には本土を踏んでいた高畑は、そのままの足で目的地であるニツク？ヴィルヌーヴの邸宅の見える丘へ来ていた。

今までの経験から考察した高畑は、先程の諸澤からの連絡では学園長が濁して伝えなかった部分を読み取り、誰にもバレないよう隠れて行動している。

理由は簡単で、世間は『神楽坂明日菜』という存在をきちんと理解していないというのに、『神楽坂明日菜』の問題の為にネームバリューのある高畑が動いたとなれば、それは『神楽坂明日菜』に何かあると公表するようなものである。

せっかく高畑と神楽坂の関係を知った上で、理由をこじつけてまで任務を与えてくれた事に感謝する高畑は、丘から眼下に広がる邸宅の周囲を探っていた。

「逃げられたせいか、警備がきつい……」

個人の家にしては仰々しい警備にかこまれた邸宅は、高畑からしてみれば自らの失態の象徴でしかないが、実際には邸宅の中でニツクがランディとジョゼフという大物を呼んで会議をしている為に、要人警護も含めて守りが堅いだけだったのだが高畑には知るよしもない。

通常ならば仰々しい警備を見れば諦めるだろうが、ここに居る高畑の戦力は通常という言葉にくるには難しく、むしろ2階の窓からチラリとニツク？ヴィルヌーヴの写真と合致する男と、それを叱

責する男が見えた為にやる気は十分である。

小さく呼吸すると、高畑は丘から飛び降りた。

過剰な攻撃をする気はないとばかりに、警備の動きを読み取り、警備の技量を感じ取り、直線距離で邪魔になる警備のみを居合拳で黙らせて沈めていく。

幾重に守る警備を食い破り、窓を破って侵入すればそのまま室内の2人を昏倒させ、壁越しに把握できた屋内警備を壁ごと居合拳で沈めてしまう。

後は簡単なもので、そのまま写真の男であるニツクの四肢を念のために砕いて肩に担ぐと、慌ただしく右往左往する警備をかくぐり逃げ出せば任務完了である。

後はこの男を麻帆良へ連れて帰り、神楽坂明日菜を調べた目的と実行犯を吐かせることさえできれば、実行犯に逃げられた雪辱を晴らした事にもなるだろう。

この旧世界にわざわざジョゼフ自ら足を運んだ理由は、書面や声だけではわからない部分までニツクから読み取りたかった事と、そして

「そうじゃな、そのままいけば利益は大きい」

「では、このまま派閥に介入しつつ制御しましょう」

そう、こうしてニューゲート魔法監獄に囚われた政友のピクマと会う為でもあり、これからの行動指針を定める為でもあったのだ。

旧世界にわざわざ来るチャンスなど少ないので、せっかく来たからには会うべきだと考えていたジョゼフは、魔法世界の住人にして

は旧世界の人間に気をきかせ席を外して会議室を2人きりにしてやつていた。

今のは語弊があった。ジョゼフにとっては如何に大事とはいえ、旧世界の人間の生死などは些末事に他ならず、ニックやランディとの連携は捨て去り独自に動く予定だった。

その為にこそ、こうして監獄内 相変わらずリゾート地のようだが に来て話をしていたのだ。

口を動かして渴いた喉に一息で紅茶を与えると、爽やかな香りとともに渴きを潤す上物の紅茶を飲みきる。 お代わりを注ぐ人形を無視するように時計を見れば、どうやら随分と集中していたようでありかなりの時間が経過していた。

「さて、そろそろ私は戻ります」

「うむ。 しかしジョゼフ、努々気を抜くんではないぞ」

座り心地のよい席から立ち上がり、ゆっくりと部屋を辞そうとしていたジョゼフの背中に声をかけられ、振り返ったジョゼフを真剣な目で見詰めるピクマンが居た。

その瞳に映るのは自身への心配であるが、むしろ元老院内で共に居られない事への後悔の色も強く、滲みでる自戒と自嘲が読み取れた。

「過度に派閥へ傾倒せず、言ってしまえば浮動票として甘い蜜を啜るようにして、大きな権益を求めず要所要所で細く長く奪ってきたが、時には上手に時には下手に出てくる間抜け共を笑ったが、気付けば足をすくわれてこのざまよ」

メガロメセンブリア元老院において、ピクマンとジョゼフの立ち位置はとも政治家として誉められたものではなく、俗に言うと

ころの信念なき風見鶏だった。

いや、まったく信念が無い訳ではなく、どちらも利益を得る為に全力を注いでいたと言える。この2人が政友であると知る者は少なく、特に同期というわけでもなければ同郷でもない、むしろ年齢差は親子ほどある。

今となつては政友の2人だが、実は本人でさえ何故ここまで一緒に動くようになったのか、切欠をまったく憶えていなかった。初めて会った時は共に眼中になく、気付いたら2人は求めあうように補いあうように、利益という言葉のみを信奉して元老院で動いていた。

2人は大きな議決において、時に同じ派閥に纏まり時に敵対し派閥同士の動きを制御し、時には無駄に煽り事を大きくしまりもしてきている。

そうやって小さいながらも奪い続け、積み上げ続けた結果として、権益や利益の奪われた部分部分が糸となり偶々動きを縛られた議員が出た。だから大きく奪って目の敵にされないようにしてきたピツクマンは目をつけられ、あれよあれよと有ること無いこと罪状を言い渡され、気付いた時にはバカにしていた相手によって肅正されていたのだった。

9話 追うもの追わせるもの（後書き）

偶には後書きを書いてみようと考えてみましたが、特に思い付きませんでした……

ありきたりな言葉ですが、小さな疑問から大きな疑問まで何かありましたら感想の方へお願いします

感想の1つ1つが作者のやる気を奮い立たせてくれますのでよろしくお願いします

10話 動くもの動けないもの

地下の直通路を歩き、屋敷へと帰ってきたジヨゼフを待ち受けていたのはニツクからのつまらない歓待でもなく、ランディからの元老院の情報を少しでも抜き出そうという気分の悪い視線でもなかった。

帰ってきたジヨゼフを迎えたのは、通路の途中でも聞こえていたが、耳をつんざくようにして鳴り止まないサイレンの音と、蜂の巣をつついたように慌てふためく警備の連中だった。

「おい！」

背中からかけられた強い声に、いったいなんだとばかりに振り返れば、そこには自身の体が木っ端かなにかかと感じてしまうほどの剛腕巨体の男が、こちらを鋭い眼差しで睨み付けていた。

生憎とこんな低脳そうな輩に友人は居ないが、どうやら相手もこちらに友好的ではないらしく、睨むだけではなく杖の先が向けられている。

「貴様は何者だ！」

そこで、ふと相手が着ている服装は警備の連中が着ているものだと思い出し、飼い犬の躡すらできないニツクを脳内で罵倒しつつ、ぞんざいに自分の姓名と所属を名乗る。

最初こそ名前を聞いても『誰だ？』と訝しんでいた相手だったが、段々と理解が及んだようで顔を蒼白くしていき、所属であるメガロメセンブリア元老院の名を出す頃には憐れにも膝を震わせていた。

例え正義に燃える善良な政治家であれ、政治界の苛烈さや悪意に嫌気が差して政治の理念からは少し身をいた中道の政治家であれ、

それこそ自身のように他者を蔑ろにし踏み潰す事で利益を探る政治家ならば尚更だが、政治という社会的な権力構造で上位に居る者には多寡に差こそあれ、少なからず嗜虐的な趣味を持っている。

いや、例外として普段嗜虐的な立場にあるからこそ、逆に自虐的な趣味を発露する輩も居るが今は置いておく。

何が言いたいかといえば、例に漏れず嗜虐的な思考を宿している身からすれば、片腕を振るだけで自身を殺せそうな巨体の男が、あくまで脳筋そうな相手ではあるのだが恐怖におののき、自らの生命の心配をする哀願の眼差しをされるとそそられてしまう。

別段男色の気があるわけではないのだが、やはりこれほど判りやすいまでに力強い相手が貧弱とも言うべき私に恐怖するというのは、社会構造の縮図を見せられたようで昂ってくるものがある。

とはいえ、このような状況下に置かれていることもあり、目の前に翩るにはちょうどいい獲物がいるにも関わらず、時間の都合上からいたぶるでも殺すでもなく、昂る嗜虐心を内心なんとか慰める。

「……ふん。それより、これは何の騒ぎだ？」

「がっ、外部からの襲撃です！ 議員殿のもとへは賊が向かわなかったでしょうか？」

この邸宅とニューゲート魔法監獄が繋がっていると知る者は、当然その秘匿性も相成り少ない。

だから、態々そこに行っていたとは言わず、むしろ現状を聞き出してから顔を顰めた。

「被害の程はどうなっている」

「警備に当たっていた者には、重傷5人と軽傷が11人」

「お前たち如きの被害に興味はない」

「はっ！ 会議室に在室していたロジャーズ氏は意識不明ですが軽傷、共に在室していたヴィルヌーヴ氏は…… その」

先程よりも更に顔色を悪くしつつ、急に歯切れが悪くなるのに苛立ちながら、「早く話せ」とせつつけば意を決したように口を開いた。

「ヴィルヌーヴ氏は、賊に誘拐された恐れがあります」

一辺の曇りもなく、ただの欠片の冗談も含ませずに言われた言葉に、理解よりも納得よりも疑問が首をもたげる。

誘拐は通常、どこかが後ろ楯についていて、情報収集から実行？ 離脱と複数による連携が常套手段である。とはいえ、賊が単独か複数かといった部分は、今はそれほど重要ではない。

今一番の疑問は、犯人の意図だった。

何故犯人は、この邸宅に侵入した挙句にヴィルヌーヴを誘拐したのか？ 様々な可能性が考えられるが、それを否定する様々な理由もある。

まず1つ目だが、犯人が元々かなり私腹を肥やして金を貯えていたヴィルヌーヴを狙い、その身柄を確保した上で脅迫なり拷問なりでの略奪を考えた場合だ。

しかし、その割りには邸宅内の金品には手をつけず、しかも警備が固くなった今を狙う必要は無いだろう。

2つ目の可能性だが、犯人が魔法世界で何らかを成す為に、元老院議員である自分を狙っていて、偶々席を外している時に侵入して代わりに居たヴィルヌーヴを誘拐した場合だ。

しかし、緊急の案件で旧世界に来たことを嗅ぎ付けるほどの相手が、態々標的が居ないから違う者を誘拐するなんてあり得ないだろう

う。肉親のような近しい者ならまだしも、ビジネス相手でしかない者を誘拐するのはリスクを抱えすぎる。

3つ目の可能性だが、犯人は旧世界で何かを成す為に、ここに集まった権力者なら誘拐するのは誰でも良かった場合だ。

これこそあり得ない話で、だったらなぜロジャーズが無事なのか
が問題になる。

明確に何かしらの理由があり、他の手段では達成できないのでヴィルヌーヴを誘拐したと考えた場合、いったい何があるだろうか？
考え事をしつつ、無言で歩き始めた私を慌てて囲うようにして、
それぞれが喧しく「危険ですから避難を！」と喚く警備を散らせ、
足早にロジャーズが寝かされている部屋へと急ぐ。

既にジョゼフの中では、犯人の魂胆こそわからないものの、狙いは他の誰でもなくヴィルヌーヴだったのだと自己完結していた。
そして自己完結した上で、犯人は既に逃亡済みだと考えていたので、
この場合は安全だと考えていたのである。

これは誰も知らぬ事だが、事実ヴィルヌーヴを誘拐した高畑は、
面倒な追っ手や公的機関の搜索を嫌い、尋問に関しては麻帆良にて
時間を費やすべく即座にウェールズを離脱していた。

それはさておき、部屋を目指しながらもジョゼフの頭のなかでは
今回の事件について考えていて、少なからず犯人に当たりはついて
いた。

しかし、それに絶対的な自信があるわけでもなく、動くには余り
にも拙速に過ぎると感じており、犯人の可能性としては3割もない
が、現状ではもっとも可能性が高いだろう。

ロジャーズが犯人を見ていれば簡単だが、こうも手際のいい犯人
がそれを許すとは思えないが、これも確認作業だと目的の部屋へ入
った。

「キング様、ご無事でしたか！」

声をあげた白衣の医者に、無事であり怪我はないと伝えたと、眠ったままのロジャーズを起こすように言った。話を聞くに、どうにも偉い相手だけに、自分の一存では起こし難かったようだ。

「ん…… あ、ここは？」

「起きたか」

目覚めてゆつくりと周囲を伺うロジャーズに声をかけると、声を聞いて反射的にこちらを向いて、相手が私だと気付くと更に驚いたような顔をした。

まあ、これに関しては理解できる。寝起きに自分より偉い人間が近くにいれば、私だって驚くだろう。

「何があつたか話してやる」

襲撃があつた事を説明し終えた時、ロジャーズの顔に映っていたのもジョゼフと同じ類いの疑問だった。だが、それをあえて無視し、問題の犯人を見たか聞いたのだが、やはりと言うか予想通りと言うか見ていないようである。

「そうか…… やはり、犯人を見ていないか」

「申し訳ありません」

「いや、仕方ない。しかし、だ。これはウェールズ魔法協会への、いや我々メガロメセンブリア元老院への重大な挑戦だと私は受け止めている」

謝る言葉が終わるや否や、被せるように口にしたこちらの意見に

対して、ロジャーズは顔を顰めかけてから慌てて真顔に戻した。

これは簡単に言ってしまうえば、組織の上下確認である。確認した上で、捜査権はウェールズ魔法協会ではなくメガロメセンブリア元老院にあると主張したのである。

ロジャーズが顔を一瞬だが顰めたのは、それが理解できたからではない。それを理解した上で、起きたばかりの弊害が事件捜査の名も実も利益が読めないのだ。

「……しかし、態々本国のお手を煩わさずとも」

「我々はどのような相手であれ、貴賤に関係なく挑戦を受ける立場にある。私が居ぬ間を狙う薄汚い賊であれ、挑戦してくるならば我々が滅ぼすまでだ」

元老院としての立場を強調され、元老院は敵にたいして強硬に対処すると主張を聞かされれば、残念ながら現在の立場がウェールズ魔法協会の代表でもないランディは、何らかの利益が奪われた事だけは理解しながらも、歯噛みしつつ飲むしかない。

「起きてすぐで悪いが、捜査権が元老院にあると伝え、急いでこの邸宅を現場として確保してほしい」

「わかりました」

連絡をするロジャーズから目を離し、急いで地下からニューゲート魔法監獄へととんぼ返りして、先程まで会っていたピックマンの元を訪ねた。

すぐに出戻って来たジョゼフを訝しんだが、その取り乱し様から冷たい飲み物を人形に用意させると、先程と同様に向かい合っている。

「何があつた？」

ジョゼフが説明を終え、温くなった飲み物に手をつける頃には、ピクマンも難しい表情で腕を組んで黙っていた。

何があつたのか理解できたし、ジョゼフが何を感じたのかも理解できた。しかし、そのどれもに、根拠の2文字が足りなかった。

「ふむ…… 確かに関東魔法協会への侵入に失敗し、連絡が途絶えた事から消されたと考えたとしてじゃが、最低限考える頭さえあればこの襲撃は悪手だとわかるじゃろう。小さな組織ならともかく、魔法協会のような規模を持ったものがやる事ではない」

「ええ、それは私も感じましたが、ヴィルヌーヴを誘拐するプラスと今襲撃するマイナスを考えると、逆に小さければ小さい組織ほど割りにあわなくなってきました」

何より難しいのは、結局誰が襲撃してもマイナスになるのである。搾るのは恣意的にならざるを得ず、そうなれば可能性は関東魔法協会が一番高いと考えたのだ。

「それで、今は何をしているんじゃ」

「まだ現場の確保を指示し、捜査権をウェールズ魔法協会から元老院へ召し上げた段階です」

「だとすれば、賭けにはなるが元老院で関東魔法協会に近い輩の切り崩しも必要じゃな。有力者が多いという意味では、ここに居

る連中への意識操作はわしに任せなさい」

話が早くて助かると頷いたジョゼフは、拙速には拙速でぶつか
べく次の手を考えていたのだった。

11話 組むもの組まないもの

ウェールズ魔法協会の本部に1室間借りし、ジョゼフは次々と運び込まれる資料を電子媒体から紙媒体まで目を通し続けていた。

既にヴィルヌーヴ邸の解析は済ませてあり、わかっているのは犯人は手際がよく合理的で、更には狡猾な人物であり、侵入は近くの丘から直線的に突き進み、帰りはあちこちに攻撃を仕掛ける事で陽動や攪乱をしていたようだった。

おかげで最初は侵入した犯人の人数すら読めず、強力な攻撃により警備は恐慌状態にまで陥ったらしい。

それと、新たな犯人の情報としては、侵入時と撤退時に破壊された部分を調査した結果、破壊痕こそ残っているものの火の気が無い上に火薬類も確認出来なかったので爆発物はある得ず、魔力の残痕も明らかに希薄である為に、犯人は気がそれに類する技術をもった達人レベルの存在であると断定した。

これだけでも、絞り込みの条件としてはかなり捗るだろう。なんせ、純粋な魔法使いを省けるだけで、いったいどれだけ作業が効率化するだろうか？

容疑者の絞り込みにあたり純粋な魔法使いを削っていき、気を使う人間 悪魔ではなく人間の可能性が高い や魔法だけでなく高度に気も使える人間を割り出していく。

まずそのふるいにかけるのは、いまジョゼフが目を通してあるリストの中からである。このリストは、まず無いだろうがここ1ヶ月内にイギリスへ入国した者と、襲撃後から今にかけて出国した者のリストになっている。

とはいえ、余程の間抜けか抜けか、こちらを舐めていない限り入国も出国も正規ルートならば偽名だろう。何度も言うがこれは確認でしかなく、犯人が居ないのは『残念』ではなく『やはり』なのだ。

本命はこちらと並行して、ウェールズ魔法協会を動かす陣頭指揮をロジャーズに任せた方で、そっちには日本国からの正規出国リストと、各国に点在するNGOへ正規に出向している者の調査及び、情報屋を使った非正規リストを作らせている。

魔法協会はそれぞれが敵対しているわけでも、それこそ非法組織でもない。拠点を置いた国家の法を遵守してるかは別だが、ので、元々理事長から一般職まで横の繋がりとして権限があれば開示されている。

役員ともなれば、当然閲覧権限は与えられており、開示された情報を元に気の使い手をリスト化し、その使い手が国内に居るか国外に居るかを調べさせた。

これでは日本国から非正規に出国した場合、足取りを追えなくなるのではないかと考えるだろうが、ウェールズ魔法協会からネギ？スプリングフィールドを奪うという理不尽に対して、せめて監視員として受け入れると関東魔法協会に挨拶込んだ者が居るので、非正規で出国したとしても関東魔法協会に居るか居ないかはわかるのである。

あれから時間が経ち、PCモニタを見ていて疲れた目を解していたジョゼフのもとへ、こちらも疲れた表情のロジャーズが訪ねてきた。

にこやかでも和やかでもないが、殺伐とした空気の中でロジャーズは脇から椅子を取り出し、ジョゼフの対面に座った。

「ある程度の目処がたちました」

「絞り込めたのか？」

「まずわかったのは、関東魔法協会は綺麗な組織ですね。居るは

ずなのに居ない人間なんて居やしない」

元老院を皮肉ったのかウェールズ魔法協会を皮肉ったのかはわからないが、どうやらロジャーズの態度を見る限り関東魔法協会は白のようだが

「ただし、1人だけ動きが異質な人間がいました」

「異質だと？」

こちらの疑問に対して、勿体ぶるように小さく頷いたロジャーズは、ゆつくりとその理由を口にした。

「ええ。北アフリカで利権の絡み合いも、世界の金の動きも理解せずに戦う『悠久の風』によれば、関東魔法協会から派遣されていた高畑？T？タカミチは、戦闘の間に一時期ですが消息不明となり、先程ですが急遽予定を繰り上げて帰国したそうです」

「随分とまた……大物が出張ってきたな」

容疑者候補である高畑とは、過去に輝き今に名だたる『紅き翼』に所属した実績があり、それが解散し散り散りとなった今も精力的に動いている為に、所謂直接的な権力こそ無いものの名誉と人望を人一倍築いてきた男だった。

その実績こそ眩く燦然と輝くものがあるが、我々が我々として元老院にある限り魔法も使えぬ輩を『立派な魔法使い』に選ぶ事はあり得ない。魔法世界に必要な『立派な魔法使い』とは、元老院の既得権益を侵さず我々のお題目に対して不審すら抱かず、ただ黙って言われた通り踊る者である。

そんな『立派な魔法使い』の条件はさておき、約5時間前に北ア

フリカを出発したとなると、ロジャーズ曰く日本への到着は残り5時間近くは残っているらしい。

機上の人となった高畑からヴィルヌーヴを奪う事は不可能で、関東魔法協会に入られでもしたら監視員でも見つける事は難しいだろう。 いったいどうしたものかと悩んでいるところで、急にロジャーズが神妙な顔を見ると、部屋に備え付けのテレビの電源を入れた。そこに映るものと、語られる内容にジョゼフは絶句してしまう。

「捜査権は差し上げましたが、我々ウェールズ魔法協会こそが真の被害者です。 これは当然ながら、正統な権利なのです」

神妙な表情で、しかしかすかな歡喜を漏らすロジャーズがテレビから視線を奪うように立ち上がり、どこに感謝の意がこもっているのかもわからない最敬礼をする。

「ご協力ありがとうございます。 我々はメガロメセンブリア元老院の”支援”により、必ずやウェールズ魔法協会の手により犯人を捕まえてみせます」

ここで初めてジョゼフは、ロジャーズを手元で管理しなかった事を内心嘆き、屈辱のあまり無意識の内に齒軋りしていた。

この部屋のみならず、関東魔法協会では魔法関係者が居る部屋ではテレビの電源がつけられ、突如行われたウェールズ魔法協会からの宣言に聞き入った。

しかし、関東魔法協会を束ねる理事長を勤める近衛近右衛門は、半ばこれを話し半分に聞き流している。

「この考えは既にメガロメセンブリア元老院からの”賛同”を得ており、”支援”を受けるからには犯罪者を逃す事はできない。犯人の意図は未だ連絡がなく不明だが、ニック？ヴィルヌーヴ所長を誘拐する卑劣漢を許すわけにはいかないのだ！ 全世界の魔法使い諸君と其を束ねる各魔法協会殿、どうか我々と共に手を取り合い、犯人逮捕へ尽力して欲しい」

強く宣言してから頭を下げるウェールズ魔法協会理事長　メル
ディアナ魔法学校の校長だ　の姿を見ても、近右衛門の胸に響くものは何もない。

そもそも、あくまで世間ではニューゲート魔法監獄の酷さは噂でしかないが、それが紛れもない事実だということを知近右衛門は知っており、その所長が本当かはわからないが誘拐されたくらいで、ここまで異例の早さで宣言など出せるだろうか？

単純に考えてしまえば、この宣言はこちらの世界の人間であれ魔法世界の人間であれ、少しでも関わったならばヴィルヌーヴ所長を助けなければ纏めて失脚するという脅しだろう。便宜を図った人間も凶られた人間も失脚するとなれば、ウェールズ魔法協会も全力で動くであろうし、周囲の賛同も根強い事までは読める。

他にも何らかの意図が隠されている可能性もあるが、その意図に関しては情報が少なすぎ、読み取るにはかなり難しいものがある。

だが、例えばどんな裏があったとしても、関東魔法協会に関わる内容でなければ問題はない。

「学園長！」

ウェールズ魔法協会による宣言がなされてからと言うもの、学園長室は魔法先生はもとより魔法生徒まで千客万来の様相をていしており、入れ替わり立ち替わり入って来ては正義の魔法使いらしく『宣言への賛同』を要求してくる。

正義の味方を目指す彼等にてつてみれば、悪事をなす犯罪者を捕まえるのを手伝うのは当然の事で、困難に立ち向かってこそ自らの成長があると信じて疑っていないようだった。

言いたい事を全て言い切り、気分が良さそうに部屋を出ていったガンドルフィーニの背に小さくため息を吐き、関東以外の他国の魔法協会も公式に賛同宣言を上げるのを見て、これ以上先延ばしにすると魔法先生達の心証を悪くすると考え、悪夢が近づいているとも知らずに近右衛門も関東魔法協会の理事長という公人の立場として、全世界に賛同の立場を宣言してしまった。

現状で何の情報もない近右衛門からすれば、賛同せず身内の失望を態々買うよりは、特に何かをするわけではなく宣言への賛同の姿勢を表明する方がリスクが少なく、逆にエヴァンジェリンに対する不満をそちらに向けてしまえば、統率と士気を取り戻せリターンは高く魅力的だったのだ。

だから公式に会見を開き、関東魔法協会がウェールズ魔法協会の考えに賛同し、犯人逮捕への尽力を宣言し終え、しずなに出させた茶を飲み終えて書類整理に精を出していたところにかかってきた電話に、近右衛門は表情を崩す程に困惑せざるを得なかった。

まず困惑したのが、かかってきた電話が盗聴等の心配がない秘匿性が高い番号だったこと。そして、この番号の持ち主である高畑は、国外線経由ならばわかるが、帰国は早くても1週間後のはずである事だった。

『高畑です』

「やはりタカミチ君かの。帰国にはちと早い気がするんじゃない？」

無理をして出張が1日2日短くなる事はあれど、1週間も短くなる事は普通ありえない。それに、1週間も早く帰国できるようになれば、さすがに『悠久の風』からその旨がこちらに伝えられるは

ずである。

個人的にはもう少しほとぼりが冷めるまで北アフリカに居て欲しかったが、その矛先を態々ウェールズ魔法協会が用意してくれたのだから、早めの帰国も悪くはない。

と、近右衛門は高畑の本題を聞く前は、全てを樂觀視していたと言つてよい。

『指示通り明日菜君の情報を握っていたニツク？ヴィルヌーヴを捕縛してきましたが、学園長室でいいですか？』

「……？」

それを聞いて、最初は高畑が何を言っているのか理解出来なかった。自分とよく似た言語であり、意味はわかるが理解出来ない矛盾が脳内を錯綜する。

今この瞬間、魔法使いであり政治家でもある近右衛門は今までの人生でも数少ない、所謂現実逃避をしていたのだ。

しかしながら、類い稀な経験も長くは続かず、脳内で弾いていた算盤が音を立てて崩れると同時に生じた酷い頭痛を感じつつ、とにかく電話越しでは話しにならんと一刻一秒でも早く学園長室へ来るように命じ、電話を叩き壊す勢いで切った。

「いかん…… これはいかんぞ」

まさかこんな間抜けを見るとは思わず、重たいため息を吐いてから背もたれに倒れ込むと、髭を撫でつつもう一度ため息を吐いたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7564u/>

アルベール?カモミールを巡る諸問題

2011年8月30日22時58分発行